

# 小樽のひとに学ぶ



小樽商大生が

小樽のひとにインタビュー



国立大学法人小樽商科大学



文部科学省

地(知)の拠点

## はじめに

この冊子は、小樽商科大学の学生が地域の特徴や課題を検討する授業と教育プロジェクトの一環として、小樽在住の23人の方にインタビューし、記事にまとめたものです。

お話を伺った方は、明治期に創業した老舗、市民になじみの飲食店のおかみさん、運河保存運動、まちづくり関係者、小学校教師、学芸員や研究者などの専門家、引き揚げや移民の経験をお持ちの方など、さまざまな領域でご活躍されており、年齢は50代から90代と幅広い世代にわたります。

一方、インタビューした学生は、小樽のことをまだよく知らない1年生が中心で、学生たちはこのインタビューを通じて、小樽を学んでいきました。学生は、授業でインタビューの方法や記事のまとめ方を学び、3～4名のチームでインタビューを実施して、1500字程度の記事を作成しました。

小樽は明治以降、国際的な貿易港として発展し、その後、急激に衰退したことで、歴史的建造物をはじめ、多様な歴史文化が現在もまちの至るところに息づいています。小樽をより深く理解するには、小樽のひとから学ぶことが重要です。インタビュー記事が小樽を再発見するきっかけの一つとなれば幸いです。

お忙しい中、インタビューを引き受けてくださった方および、関係者の皆様に、深く感謝申し上げます。

インタビューは、平成28年度の小樽商科大学の地域志向型授業（グローバルズムと地域経済、担当教員…江頭進）および、文部科学省「地（知）の拠点整備事業」の地域志向型教育プロジェクト「小樽・後志におけるヒューマンストーリーの発掘と地域資源化」（プロジェクト代表…後藤英之）の一環として実施しました。

授業のテーマは、主に昭和30～40年代の小樽に関する歴史・社会・風俗・文化を調査することを通じて、地域の特性や課題を洗い出すことで、大学で必要とされる課題発見力、社会調査法、そして正しい日本語の表現方法を身につけることを目指すものです。

授業は全15回で、小樽の特徴（歴史文化、社会経済）、取材方法、記事のまとめ方についての講義、フィールドワーク（小樽市内バスツアー）、ゲスト講師による講演とディスカッション（石井慧・北海道新聞記者、谷口雅春・ライター、平成28年7月13日）により、地域社会への理解を深め、取材と記事作成方法を習得しました。

地域志向型教育プロジェクトの一環として、インタビュー先のうち花園界限の5名の方と学生による公開座談会「小樽のひとに学ぶ～花園界限のいまむかし～」を実施しました（平成28年12月5日）。公開座談会の内容の一部は本冊子に収録しました。

# インタビュー関連 MAP



- 1

株式会社 石井印刷
- 2

小樽市総合博物館運河館
- 3

ヴィナス美容室
- 4

運河プラザ喫茶「一番庫」
- 5

三川屋
- 6

稲穂小学校
- 7

カネイ商店（小樽中央市場第3棟）
- 8

龍鳳
- 9

元越中理容所
- 10

北海道職業能力開発大学校
- 11

元佐々木銃砲火薬店
- 12

小樽商工会議所
- 13

桂苑
- 14

小樽地獄坂文学資料館
- 15

鈴木吾郎氏アトリエ
- 16

市立小樽文学館
- 17

北海道新聞中販売所
- 18

和光荘
- 19

カフェ・ミカーサ
- 20

木彫工房メリーゴーランド
- 21

カット&パーマヤマシタ
- 22

BAR HATTA

## 目次

はじめに	p03
インタビュー関連MAP	p05
チーム01 運河保存運動、その後（石井伸和さん）	p06
チーム02 博物館長から見た小樽らしさ（石川直章さん）	p08
チーム03 小樽活性化に取り組む老舗美容院（近藤順子さん）	p10
チーム04 小樽が嫌で飛び出して、魅力を再発見（佐々木一夫さん）	p12
チーム05 三川屋と花園三丁目（道井忠雄さん）	p14
チーム06 小樽と後志の小学校で教師をつとめて40年（山川隆さん）	p16
チーム07 中央市場の鮮魚店（武田知恵美さん）	p18
チーム08 稲北の大衆食堂「龍鳳のおかみさんに聞く」（太田和子さん）	p20
チーム09 日銀支店長御用達理容店から見た小樽（越中順子さん）	p22
チーム10 小樽の歴史的建造物の研究と保存「まちづくり」（駒木定正さん）	p24
チーム11 佐々木銃砲火薬店の仕事（佐々木徹さん）	p26
チーム12 市役所職員として小樽のまちづくりに関わって（佐藤誠さん）	p28
チーム13 都通りの大衆食堂「桂苑のおかみさんに聞く」（澤田富美子さん）	p30
チーム14 名物女将が見た小樽（末岡睦さん）	p32
チーム15 彫刻家の小樽の街への思い（鈴木吾郎さん）	p34
チーム16 小樽と市立小樽文学館（玉川薫さん）	p36
チーム17 朝里のまちづくり（中一夫さん）	p38
チーム18 北の誉と和光荘（野口禮二さん）	p40
チーム19 戦後樺太引き揚げと小樽（橋本克久さん）	p42
チーム20 小樽・後志からドミカへ移民（濱谷均さん）	p44
チーム21 運河保存運動から雪あかりの路へ（山口保さん）	p46
チーム22 手宮のまちづくりイベント（山下秀治さん）	p48
チーム23 ベテランバーテンダーの見た風山（八田康弘さん）	p50
公開座談会「小樽のひとに学ぶ」花園界限のいまむかし」	p53

## 運河保存運動、その後

いしい のぶかず  
石井 伸和さん

株式会社石井印刷代表取締役社長  
NPO法人歴史文化研究所副代表



### プロフィール

昭和31(1956)年、小樽市生まれ。釧路大学経済学部卒後、小樽へもどり、運河保存運動をきっかけに小樽の歴史文化を活かした様々なまちづくりの活動にたずさわる。平成元(1989)年、石井印刷代表取締役に就任。同16年、歴史文化研究所副代表に就任。同21年に創刊した月刊誌『小樽學』の編集人を務める。

めたお祭りであるという、原点に立ち返ってみる必要があると思うよ。

—現在の若者についてどう思いますか。

石井さん…何をするにしてもデジタルになっているね。デジタルのもので調べても、手に入るものは手っ取り早い情報だけで、生きた情報は手に入らないよ。スマホとにらめっこして毎日を過ごさんじゃなくて、もっとアナログなことに目を向けて、街に出て、いろんな人と話したり交流したりするのいいと思うよ。こんな時代だからこそ生きた交流を大事にして欲しいなと思いますね。

### 小樽観光の現状

—現在の小樽の観光についてどう感じていますか。  
石井さん…観光客にはVi(ビジャー)、Re(リピーター)、Fa(ファン)、Co(コミュニティ)、Bu(ビジネス)、このビレファコブの5段階があると私は考えています。お寿司を食べて、運河で写真を撮って、2〜3時間で観光を終えるのがビジャー。2回目の観光をしに来るのがリピーター。そしてファンになり、小樽のコミュニティに関わりたくなる。そして小樽を市場の領域にするようになるのがビジネス。この先に移住というゴールがある。現状はファンになってくれる人も結構いるように感じる。でもコミュニティの段階まで中々進まない。この段階にこそ若者に一役かってもらいたいと思っている。例えば、夜ホテルに泊まる

今回、私たちは、かつての運河保存運動、さらにいまの小樽の観光やまちづくりなどの様々な活動に携わっていらっしゃる石井伸和さんにお話を伺った。小樽が観光都市として成長していく過程や今後の小樽の在り方など、興味深い話を伺うことができた。

### 生い立ち

—石井さんはどのような環境で育ったのでしょうか。ご家族の方のことなどもよろしければ教えてください。

石井さん…母は私のことをとにかく男らしくあれと育ててくれました。弱音を吐くことはもちろん、勝負に負けるのは自分の責任と、よく言われたものです。父の会社を継ぐ気持ちはずっと持っていました。大学は京都でしたが、仕送りは予定の半分しか貰わず、生活費は自分で工面していました。アルバイトもしたし麻雀が得意だったのも幸いしました。そんな学生生活を終え、小樽に帰省し運河保存運動に参加するところに繋がっていました。大学時代に幕末の志士に憧れ、幕末は国、今は地域ではと直感したからです。

### 運動は「志」

—石井さんが運河保存運動に参加しようと思ったきっかけはなんでしょうか。

石井さん…当時で言う歴史的建造物や運河を取り

観光客が外に出て、飲みながら交流できるような賑やかなBARがあるだけで、その観光客はそこにいる人達と話が出来たり、コミュニケーションを取れるよね。こういうようなことが、小樽のコミュニティに興味を持つ第一歩だと私は考えています。小樽商科大学の学生にもこういうような所で活躍していつて頂きたいと思っています。

### 小樽を世界中のモノが集まるまちに

—最後に、現在石井さんが今後の小樽について考えていることは教えてください。

石井さん…今私が考えていることは大きく分けて政治、経済、文化の3つです。政治は選挙のことについて。現在の選挙にどうしても納得がいきません。新しい選挙のモデルをまずは小樽から示していきたいなと考えています。経済については現在リマシオ構想(Reマーケット市場小樽)というものを考えています。小樽を世界中の古品が集まる再市場都市にしてしまおうという構想です。最後の文化は、今ある観光名所は数ある内のひと握りだから、もっと価値と文化のあるものを掘り起こしていこうという考えです。

### まとめ

—今回のインタビューを通して、我々を学生としてではなく、一人の若者として接していただけた。その姿勢から当時の運動を牽引して行った石井さ

壊して、道路にしてしまうのはもったいないと感じていました。運河保存運動を通して、建物を活かして小樽を観光都市に成長させていった方がよいと考えるようになりました。

—ご自身が運河保存運動を積極的に行っていく上でのモチベーションはなんだったのでしょうか？  
石井さん…運動は直接的には一銭の得にもならない、しかし運動は「志」です。自分たちの運動によって地域が少しでも良くなり、活性化につながればと思っています。運河保存運動をきっかけに、小樽の観光やまちづくりに関わるようになりました。

### 小樽の現在について

—小樽の現在についてどう思いますか。

石井さん…子供に生まれなかった私は小樽のことを実の子供のように思っています。それだけに物足りないです。年寄りが増えてきて、若者はどんどん札幌や東京に出て行きたがるようになった。例えば50周年を迎えた潮まつりもそうですよ。伝統や文化は大事だし否定はしない、でも新しさがない。もっと新しいパフォーマンや音楽を発表できる環境を整えて、若者のやりたがるような面白いことややっていけばいい。大きなお祭りになったのでなんとなく人が集まってくるけど、僕に言わせれば面白くないね。そもそも開かれた海の町として栄えた小樽だからこそ、海に感謝してお祭りをする、そうして始

んの背中を連想することができた。また、石井さんの当時の「志」と「石井さん自身」に触れることができたのは今回のインタビューの一番の収穫である。また、小樽商科大学の学生が中心となつて、様々な活動を企画、実行していくことで小樽運河だけではなく、「小樽」自体のブランド力の向上、観光業の発展などに貢献できる可能性があるのではないかと考えさせられた。

【参考文献】「歴史軸に小樽を再発掘」『北海道新聞』(2009年3月15日付)、「語る 月刊誌『小樽學』の編集人 石井伸和さん」『北海道新聞』(2009年4月21日付)



月刊誌『小樽學』。石井さんが編集人を務める。

チーム01  
鎌倉千里・小林 託・小野寺 雅刀

# 博物館長から見た 小樽らしさ

いしかわ なおあき

石川 直章 さん

小樽市総合博物館長



## プロフィール

昭和31(1956)年、静岡県浜松市生まれ。昭和56年、同志社大学文学部卒業後、同大学院文学研究科博士課程に進学。同62年、単位満了退学。その間、同志社国際高校の教員、同大資料室調査員を兼務。平成5(1993)年、小樽市教育委員会社会教育文化係として来樽。同25年、博物館活動奨励賞を受賞。同27年、小樽市総合博物館長に就任。

らとりあえず博物館に電話をして聞けばいい！となるように思われたら大成功ですね。

## 市民にとって欠かせない博物館を目指して

― 展示以外にもイベントや行事を行っていると言いましたが、その際気を付けていることは何ですか。石川さん…安全第一です。それにつきます。イベントの際にはたくさんの方が集まるので中でも一番気を付けるのはノロウイルスやインフルエンザなどの感染病です。また野外講座も常に事故に気を配っています。私たちは年間講座数を60件〜80件行っています。つまり月に5〜8回イベントを行っています。これになりなす。これは他の博物館と比べるとも多いです。従業員みなやる気があり、次はこれをやりたいあれをやりたいと聞かないんです。でも、私はこれを極力止めないようにしています。これで博物館の存在が市民にとって欠かせないものになってくると思っているからです。

## まとめ

― 今回のインタビューを通して新たに小樽というものの見方がかなり変わった。また、博物館のイメージは大きく変わった。特に石川さんが強調していた何かあったら博物館に！というのが印象的であった。小樽とともに博物館が成長しているということ

今回、私たちは小樽市総合博物館の館長、石川直章さんにお話を伺った。館長の目線から見た小樽らしさと、博物館館長としての仕事について取材させていただいた。

石川さんは昭和31年生まれ、静岡県浜松市の出身である。京都の同志社大学文学部に入學し、大学時代に北海道に来る機会が何度かあったという。平成5年に小樽市教育委員会社会教育文化係として小樽に着任した。

## 市民の一人ひとりがプライドを持つまち

― 小樽に来た時の感想を教えてください。石川さん…私が小樽に初めてきたのは実は学生時代なんです。所属していた大学の研究室の顧問に現場に誘われて北海道の博物館をいろいろと回ったときに小樽にも立ち寄りました。その頃運河はまだ埋め立てられる前でまだ臭かったころですね(笑)。いい意味でも悪い意味でも市民の一人ひとりがプライドを持っているという印象でしたね。

## 過去の栄光を忘れられないまち

― 石川さんから見る小樽らしさとは。石川さん…今の私たちの感じている小樽らしさと50年前の小樽らしさとは全く違うと思うんですね。20年前は銭湯、お餅屋さん、市場がやたらと

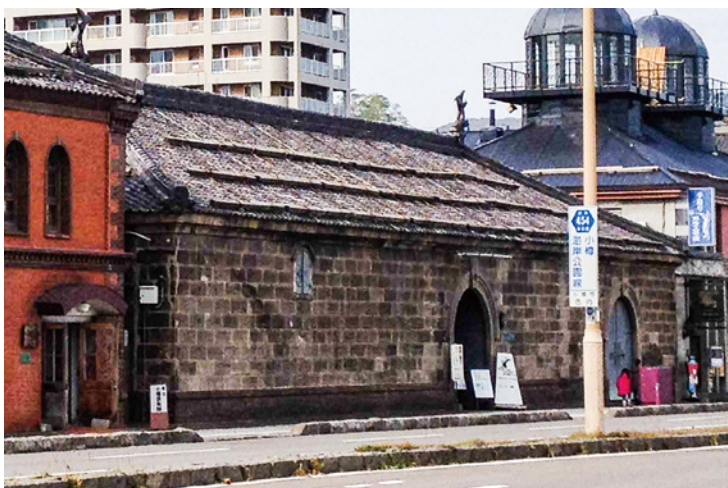
多いなと感じました。また対面販売というのが本州の方ではあまりなくて、妻が困惑していました。そんな小樽らしさというのは過去の栄光が忘れられないというところにあると思いますね。それは小樽の人たちの人間性から伝わってきますね。札幌なんて…というところから話し始める人が多いですね。札幌は文化がなくて小樽が発祥だなどと思っている人も多いです。でも、裏を返すとそれはみんな小樽が大好きなんです。小樽の企画をやると地元の方がたくさん集まります。そういうところも小樽らしいといえますね。

## 館長になって最も力を入れていること

― では次にお仕事についてお聞きします。館長になって一番力をいれている活動は何ですか。石川さん…博物館の存続について危険意識をもっています。小樽の財政が厳しくなつて博物館を廃止することになった場合、市民が反対するような強い市民意識を作ることが大切で、一番に力を入れている活動です。博物館は展示だけではなく、何でもできる、小樽のことについて分からないことがあった時に聞いたならなんでも答えてくれるといった意識を市民の人にもってもらえる様に努力しています。私の希望としては博物館を普段から使つてほしいですね。わからないことがあった

がよく分かった。

【参考文献】「帰化人(26) 小樽市総合博物館 副館長・学芸員 石川直章」『小樽學』(2010年11月号)、「ひと2013 博物館活動奨励賞を受賞した石川直章さん」『北海道新聞』(2013年11月22日付)



小樽市総合博物館運河館。多数の資料が保管されているため、石川館長は運河館にすることが多い。



小樽市総合博物館運河館内でのインタビュー

チーム 02

兼平 健介・神原 将旗・山崎 瑞貴・山下 諄

# 小樽活性化に取り組む 老舗美容院

こんどう じゅんこ  
近藤 順子さん

ヴィナス美容室オーナー  
小樽美容協会会長



## プロフィール

昭和21(1946)年、神恵内村生まれ。同39年に高校卒業後、タイピスト学園入学。同41年、ヴィナス美容室に就職。真野美容学校を経て、東京の真野美容室に就職内定。同46年、ヴィナス美容室に復帰。二代目の長男と結婚。三代目となる。潮まつり、商大・北大の応援団対面式などで着付けやメイクを担当するなど、地域イベントに積極的に協力。

私たちは、創業100周年を超える小樽の老舗美容院である、ヴィナス美容室の三代目店主、近藤順子さんにお話を伺った。昭和21年生まれ、現在も美容院での仕事はもろろん、小樽美容協会の会長を務め、今年で50周年を迎える潮まつりでも最前線に着付けの担当をしている。特に、潮まつりをはじめとする、街づくりのイベントに積極的に参加しており、小樽、道内のイベントには欠かせない人物の一人である。

## 生い立ち

— 近藤さんのお生まれはどちらですか。  
私は神恵内村出身で、道内の高校を卒業後、東京のタイピスト学園へ進学しました。卒業目前に真野美容室に就職が決まるも、フランスへの留学を条件に北海道に帰郷することになりました。結局フランスに留学することはなく、昭和46年、25歳の時に二代目店主の近藤ヨシさんの息子である近藤佳政さんと結婚しました。その後三代目としてヴィナス美容室を引き継ぎました。

## お客さんの移り変わり

— 昔と今とのお客さんを比べて移り変わりはありますか。  
近藤さん…昔のお客さんは資本力があり、セット

のために週に一回のペースで美容院に来店されました。またセットした髪を解かないので、髪を洗うのも美容院で、週に一回でした。そのため開店の7時から閉店の21時30分までフル稼働で働き、お客さんを二階の部屋で待たせて忙しかったです。現在はカットアンドブローとなり、髪を切りに来られるお客さんが主で、1人のお客さんの来店は2か月に一回のペースになりました。

## 地域イベントへの協力

— ヴィナス美容室は小樽の街づくりイベントに積極的に関わっておられるそうですね。  
近藤さん…はい、潮まつりには第一回から関わっていますし、榎本武揚没後100周年イベントなど、小樽をはじめ道内各地のイベントに積極的に参加しています。イベントではヘアメイクをはじめ、特殊メイクや、衣装まで様々なかたちで協力させていただいています。

— ヴィナス美容室と潮まつりとの関わりはどのようなものですか。  
近藤さん…ミス小樽のヘアメイク、着付けなどを第一回から今年まで行なっています。ミス小樽には一般の参加者と見分けがつくように伝統的な日本髪をさせています。

— 最近関わられている「和を遊ぶ」というイベントについて具体的に教えてください。

トについて具体的に教えてください。

近藤さん…琴、三味線、尺八、太鼓、日本舞踊、花茶などの文化や芸術を保存する運動の一環として催される小樽の行事です。小樽は北海道の文化の中心地の一つですので、このような行事へも毎年積極的に関わっています。

## 小樽商科大学との関わり

— ヴィナス美容室は商大と関わりが深いと聞きましたか。  
近藤さん…対面式などで応援団のヘアメイクをしていました。昔の商大は男子学生しかいなかった

ので綺麗な子には1年髪を伸ばさせて、女役として女装させました。また、榎本武揚コンテストのような、モデルや商大生、小樽市長や青年会議所理事などの方々が出演する行事にも携わるなど、商大のほかにも小樽の様々なイベントに協力しています。

## 時代の波に乗りながら伝統を継続

— これまで様々な行事などを通じて、深く小樽に貢献されていますが、今後さらに小樽を活性化するために、ヴィナス美容室としてどのような活動をお考えですか。  
近藤さん…後継者が減少してはいるものの、伝統

は継いでいくことが大切であり、時代の波に乗りながら今まで続けてきたことをこれからも継続していくことが最も小樽の活性化につながると考えています。次期後継者も美容師としてすべての業務を修得しています。現在は小樽に住んでいる日本人が減少し、外国人観光客が増加しています。そのためには和を遊ぶのような伝統を伝える行事やミス小樽の日本髪など、美容の職業のなかでの小さな工夫の積み重ねを通じて、小樽市民を大事にして小樽の街を振興し、これからも活躍していきたいと思っています。

## まとめ

— 今回のインタビューを通して、近藤さんは当初考えていた以上に多くのイベントに深く携われ、小樽の伝統や文化の向上に貢献されてきたことが分かりました。また、変わりゆく時代の中でも最新の技術や流行を取り入れ、美容院としてもお客様のニーズに定める弛まぬ努力をなされていることが分かりました。

【参考文献】「ベストママ 近藤順子」(小樽ジャーナルHP、2008年8月)、「美容室五代」(月刊おたる) (594号、2013年12月)



インタビューの様子。机に並べてくださった資料を見ながらお話をうかがった。

たくさんの写真を取り出しながら説明していただいた。



二代目近藤よしさんが美容学校のツアーで欧州めぐりをされた時の記事。当時の様子がわかる貴重な資料。全5回の連載をすべて見せていただいた。

チーム 03  
山本 歩美・石郷岡 秀王・村上 啓輔・赤倉 郁弥

# 小樽が嫌で飛び出して、 魅力を再発見

さ さ き かずお  
佐々木 一夫さん

運河プラザ喫茶「一番庫」マスター



## プロフィール

昭和25（1950）年、小樽市花園生まれ。桜陽高校卒。札幌の喫茶店「ドック」で5年間修行を積んだ後、同50年に静屋通りで喫茶店「叫児楼」を開店。石造建造物を活用した店舗の先駆けとなる。同店には運河保存運動の関係者たちが集った。平成13（2001）年、「古道貝屋叫児楼」に転業。同16年、小樽観光協会常務理事就任に伴い、閉店。同20年から現職。

私たちは、小樽運河プラザ内の「喫茶一番庫」のマスターである、佐々木一夫さんにお話を伺った。  
佐々木さんが昭和50年に開店した喫茶店「叫児楼」は石造建造物を活用した店舗の先駆けとして知られる。「叫児楼」には運河保存運動の関係者が集い、様々な議論が交わされた。

## 生い立ち

— 佐々木さんのお生まれはどこですか。

佐々木さん…僕は昭和25年の7月31日に花園で生まれました。現在のスタイルベイ（小樽市花園1丁目10番9号）になっているところです。昔はグラフィ商会というカメラ屋さんでした。大正5（1916）年に、うちの親父が親父の姉さんと一緒に創った会社です。親父は会津生まれなんですけど、若いころは小樽高等商業学校に通い、そこを卒業して、東京にある「小西六」に勤めたんですけど、親父の姉さんの旦那が亡くなったんで、小樽に帰ってきて、ここを姉さんと一緒に引き継いだという形です。

## 小樽が嫌で嫌で、飛び出した

— 昔は小樽が嫌いだったと伺いましたが。

佐々木さん…僕が何で小樽が嫌だったかというところ、閉鎖社会なわけだよ。僕はあまり素行はよくな

を、そして小樽では何やるかって話を大ばら吹いていたわけですよ。

観光というのはその街の一番いいところを見せることだと思うんですね。僕はさっき言った古い街並みだとか、坂だとか、おいしい飲食店だとか、風景だとか、小樽が持つ歴史や風俗だとか、そういうものを見せたいなあと思って、触れていただければと思うんだけど、そういうわけか皆さん、堺町に行ってしまうんですね。

## まとめ

— 今回のインタビューでは、佐々木さんが小樽と積極的に関わっていくことになるきっかけのような話を聞くことができた、今の佐々木さんは子供時代は小樽が嫌いだったなどとは思えないほど、たくさんのことを聞かせてくれる。またカフェに行つて佐々木さんに質問してみたい。

【参考文献】「日曜インタビュー 佐々木一夫さん」『北海道新聞』（2004年6月27日付）、「今に生かす昔の建物 第5部 再活用先の駆者①」『北海道新聞』（2013年11月30日付）、「地域資源活用ビジネス①」小樽独自のビジネスモデル 叫児楼 歴史的建造物活用 佐々木一夫氏「小樽塾」（HP）

かったです。俗にいうガキ大将つてやつで。なんか悪いことすれば、もう次の日になったら町内全部に、また佐々木の息子がつてしよつちゅう言われてて。親も大変だったと思うけど、俺としては別に悪いことをやったという意識はなくて、ちよつとみんなで遊んで、ちよつとやり過ぎたかなあつていう感じなんだけど、徹底的に悪く言われてました。そういうのが中学になつても高校になつてもずーっと尾を引くわけだよ。それで、嫌で嫌で飛び出して行つただけだね。

## 古い街の中で、自分の思っている ようなことをやりたい

— 「叫児楼」を開くまでの経緯を教えてください。  
佐々木さん…実は札幌の北24条で店をやることに決まっていたんです。その前に少しでもいい店にするために、ヨーロッパのほうに行つてみようというので、その社長さんにヨーロッパに連れて行つてもらったわけです。アムステルダムとかパリだとかバルセロナとか回ったんだけど、古い建物がたくさんあつて、そういうものがすごく再利用されて尚且つ、若い人がそこでいろんなことをやってるわけよ。最初それを見たときはびっくりしてさ。ワーっと思つて、すっぱりその中に違和感を感じずに入るわけさ。どうということなんだろ



静屋通りにある叫児楼（平成28年7月撮影）。佐々木さんが昭和50年に開店。平成12年に閉店したが、菅原康晃氏が二代目叫児楼として引き継いだ。



グラフィ商会（小樽市花園1丁目10-9）。佐々木さんの父とその姉が始めたカメラ屋。カメラ販売のほか、病院ヘレントゲンのフィルムを卸したりもしていた。



グラフィ商会があった場所。（現・スタイルベイ）



運河プラザの佐々木さんのカフェでインタビュー。

チーム04  
赤松 蒼生・浅井 萌花・朝川 涼・石井 拓

## 三川屋と花園三丁目

みちい ただお  
道井 忠雄 さん

三川屋オーナー



### プロフィール

昭和21(1946)年、小樽市花園生まれ。同43年、法政大学卒業後、小樽のレストラン、ニュー三幸で6ヶ月間の修行を積み、22歳で三川屋を継いで二代目となる。三川屋小樽支店は昭和12年に開店。酒屋、駄菓子屋を経て、昭和30年代に宴会主体の飲食店となった。花園銀座三丁目商店会会長、石川県人会会計を務める。

今回、私たちは、花園銀丁目にある「三川屋」のオーナー、道井忠雄さんに、ご自身やお店のルーツ、花園三丁目についてお話を伺った。

### 三川屋が小樽に出店するまで

「道井さんの祖父は札幌で三川屋をはじめたそうですが、現在は小樽にお店がありますね。なぜ小樽に出店したのですか。」

道井さん…道井家はそもそも石川県に住んでいました。私の祖父達が北海道長沼町へ移住したのち、明治40年札幌で三川屋をはじめました。その後、私の父と父の兄が札幌で支店を出すことになりましたが、それだとお客さんの取り合いになってしまったということ、父は札幌ではなく、当時栄えていた小樽に出店することを決めました。

### ルーツは石川県

「石川県から北海道へ移住したのですか。」

道井さん…はい。祖父は小作人だったのですが地主とうまくいかず、土地を貸してもらえなくなっていました。そこで祖父の兄、当時一家の長男だった宗次郎さんは、曾祖父と兄弟とともに北海道で新しく畑仕事を始めることを決めました。長沼町へ移住し、川の近くの土地で農業を営んでいました。しかし、洪水が起るたびに作物がだ

めになってしまい、その度に生活が苦しくなりました。そこで祖父達は、札幌・旭川・長沼の3つに分かれ、それぞれで商業をはじめることになりました。

### 開店当初はお酒を販売

「そのような経緯だったのですね。ありがとうございます。次に、三川屋は90年の歴史の中で売り物が大きく変化していますが、その理由を教えてください。」

道井さん…開店当初はお酒を売っていました。しかし戦争が始まると、農作物をつくってお酒をつくるのができなくなりました。そこで私の父は、戦争中の当時甘いものがあまり売られていなかったことに注目し、店の1階で駄菓子屋をはじめることになりました。2階は宴会場として貸し出し、ラーメン等の食事を出していました。そうするうちに、次第にお客さんが増え、「これはいい」と思い、下も食堂にしようとなったわけですね。

### 花園三丁目は先進的

「お父様の代だけでそれほどまでに営業形態が変化していたのですね。現在ではなかなか見られない現象ですが、当時は珍しくないことだったのでしょうか。」

道井さん…そうですね。特にここ、花園三丁目は当時小樽の中でも先進的な地域として有名だったので、売れるものはどんどん売っていいこうという感じでした。父は非常に器用な人だったので、一日でお菓子のレシピを覚え、次の日には店頭に並べていました。今では考えられないことですね。

### 何とか花園三丁目を活性化したい

「花園三丁目には周りにもたくさんのお店があったと思います。競合といったようなことはありましたか。」

道井さん…確かに当時は多くのお店が軒を連ねていました。ですが、ライバルといった意識はなく、むしろ家族のような存在でした。花園三丁目一帯で和気あいあいとお店をやっていたという感じですね。

「同業者どうしでうまくやっていくのは一般的には難しいことですね。そんな中でもそういった仲間意識の高い関係を作り上げられたからこそ、当時の先進性があったのですね。」

道井さん…はい。当時の商店の人々は朝起きると店先でお互いにおはよう挨拶を交わし、営業が終わればお疲れさまと労いあっていました。ですが現在は少し事情が違います。うちのように自宅兼店舗といった店が減り、悪意にしていた旧友た

ちも高齢化に伴い、次々に店をたたんでしまいました。商店に活気がなくなるのは、この町内会長の私としては非常に心苦しく、なんとかしたいと思っています。父は非常に器用な人だったので、一日でお菓子のレシピを覚え、次の日には店頭に並べていました。今では考えられないことですね。

### まとめ

「道井家、三川屋と関わりの深い花園三丁目界隈を活性化していくために私たちがに何ができるのか、考えさせられるインタビューだった。」

【参考文献】「ベストマスター 道井忠雄 (小樽ジャーナル、2009年10月)」

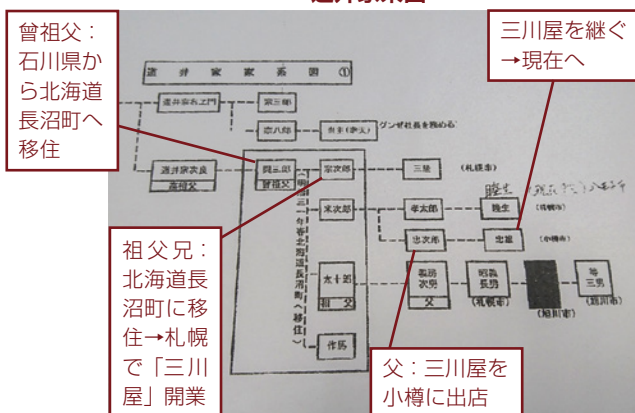


インタビューの様子

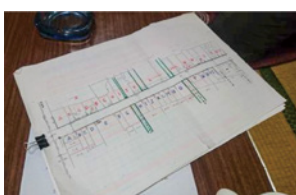


三川屋外観

### 道井家系図



店内には昔の三川屋や花園三丁目界隈の様子がわかる数々の貴重な写真が展示されている。



道井さんが作成した花園三丁目界隈の地図。当時の電話帳や写真などを元に、明治期から現在までの商店街の店舗の変遷がわかる。



チーム 05

出家祐貴・臼井優香・大野能晃・尾山真帆

# 小樽と後志の小学校で 教師をつとめて40年

やまかわ たかし  
山川 隆さん

小樽観光ガイドクラブ顧問



## プロフィール

昭和8（1933）年、古平町生まれ。余市高等学校卒。北海道学芸大学札幌分校卒業後、小樽・後志で40年間小学校の教員を務め、稲穂小、桜小、祝津小では校長を務める。平成6（1994）年、トンボハイヤー常務取締役就任。同28年、おたる政寿司創業75周年記念事業の一環として著書『小樽歴史物語』を刊行。FMおたる「山川先生の四方山ばなし」に出演中。

## 小樽と後志の教育の違いとは

「小樽と後志の教育はどのような違いがあるのでしょいか。」

山川さん「小樽と後志の教育は、一般的な都市と田舎という観点からは比べることはできません。小樽は教育環境が優れていて良い先生が多くいました。また、知識中心の教育で、子供たちはペーパーテストで高い点数を取るための勉強をしていました。それに対し後志は、僻地を抱えながらも自然を相手にした後志ならではの教育を受けていました。昭和40年代の高度成長期になると、物に幸せを求める時代になり、「よい高校、よい大学、よい会社」という考え方になって受験競争が始まりました。こうした社会の風潮により、後志の僻地でも街の学校に負けない知識の詰め込み教育が実践され、小樽の子供と変わらないワークブックや市販のテストブックが採用されました。これも後志の教育の特徴です。」

私たちは、元小学校教諭で小樽・後志の学校教育に携わってきた山川隆さんにお話を伺った。山川さんは、小学校教諭、教頭、稲穂小学校、桜小学校、祝津小学校の校長などをつとめた。現在は、小樽観光ガイドクラブ顧問として、また、講演会などを多数実施しながら多くの人に小樽の魅力を伝えている。

## ニッカウキスキーで働いたかった時期も

「教員になろうと思った経緯を教えてください。」  
山川さん「はじめから教師になる気はなく、余市で育ったこともあり、ニッカウキスキーで働くことを考えていました。あるとき、友人が「先生にだけは絶対なりたくない」と言っていて、父親の職業が教師だったので親の職業を馬鹿にされた気持ちになり、「それなら自分が先生になる」と言ってしまうんです。そこから勉強をして学芸大学札幌分校に入学しました。学生時代、一週間小学校の観察に行ったとき、子供たちと過ごす時間が楽しく感じられ、子供が好きな自分に気がつきました。そして、自分は案外先生に向いているかもしれないと思い、このとき教師になることを決意しました。今となつては教員は私の天職だったと思っています。」

## まとめ

「山川さんへのインタビューから、小樽・後志の小学校では豊かな歴史など地域の特徴や魅力を学ぶ教育が行われていることがわかった。地域の教育力を高めることで学校教育はより素晴らしいものになるだろうと思われる。」

【参考文献】山川隆「小樽歴史物語」（おたる政寿司、2014年、「ひと2014 山川隆さん」「北海道新聞」（2014年5月11日付）



インタビューの様子

## 小樽には教科書では学べないことがある

「子供たちが小樽やその歴史について知ってほしいとお考えになつている理由を教えてください。」  
山川さん「自分の生まれ育った町、村の歴史を体験させる必要があると思うんです。小樽はどこを見ても興味深い歴史がたくさんあります。そのような素晴らしい土地に住んでいるのに学ばないなんてもったいない。この地域は教科書では学べない教育の素材が数多くある、だから小樽の子供たちに自分が住む町を深く知って欲しいんです。」

## 地域の教育力を生かす

「小樽の学校教育の課題は何であると考えていますか。」

山川さん「先程話したことと少々重なる部分はありますが、子供たちが小樽についてもっと知る必要があると思います。小樽には重要で貴重な歴史がたくさんあり、それは小樽でしか学べません。教師たちも、子供に教えるために小樽についての知識を増やし、地域の教育力を生かして子供たちに学ばせるべきです。また、これは小樽に限った話ではありませんが、学校を施設して子供を不審者から守るなどという子供を守る教育ではなく、将来子供たちがそのような悪い大人にならないた



学校教育について熱く語る山川さん



山川さんが教員時代に作成した後志についての資料

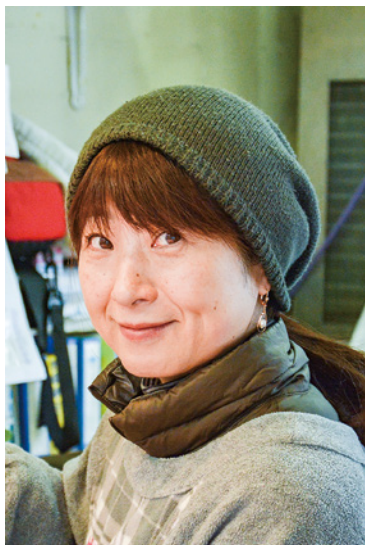
チーム 06  
勝部正義・岸田結花・久保田唯人・國分沙葵

# 中央市場の鮮魚店

ただちえみ

武田 知恵美さん

カネイ商店店主



## プロフィール

昭和39（1964）年、小樽生まれ。両親は三角マーケットで営業していた小柴鮮魚店で働いていた。小樽昭和高校（現・小樽明峰高校）卒。昭和57年から62年まで札幌地下鉄の鉄道弘済会（現・Kiosk）で働く。平成7（1995）年、妙見市場で武田商店を開店。同年、閉店。同年、三角市場で営業していたカネイ商店を継ぎ、翌年、中央市場に移転。

## 安く仕入れる方法

「商品はどのように仕入れているのですか。」  
武田さん…仲買人さんに頼んで買っています。問屋さん、仲買人さんはたくさん量の量をいつべんに買うので分けていただいたほうが安くお客さんに提供することが出来ます。それほど大きくはありませんが色内の市場（小樽市漁業協同組合地方卸売市場）では一般の魚屋さんが競りをして買うことも可能です。

## 市場の良さを知ってもらいたい

「最後に、仕事をする上でのやりがいを教えてください。」  
武田さん…やりがいはやはり地域の方に買ってもらえることです。30年以上前の話ですが、三角マーケットに倶知安、ニセコなど海のない地域から商人が来ていて売れに売れ、箱単位で買っていたそうです。しかし、徐々にスーパーマーケットなどの台頭により来なくなってしまうたそうです。そんな時代と比べると少しですが地元の方に買っていたことがやりがいです。また、若い人にもっと魚を食べていただきたいです。そして市場に来ていただいて市場の良さを分かってもらえたらうれしいです。

今回、私たちは小樽中央市場のカネイ商店店主の武田知恵美さんにインタビューを実施した。その中で武田さん自身のライフストーリー、小樽の市場について、とりわけ中央市場について興味深いお話を聞くことが出来た。

## 中央市場の客層

「中央市場はどちらからのお客さんが多いですか。」  
武田さん…地元の常連さんがほとんどです。以前あった三角マーケットは昔は地元のお客さんが中心だったのですが、三角市場になってからは観光客が中心になり地元のお客さんが来なくなっていました。地元のお客さん以外ではたまに札幌、余市、倶知安、ニセコなどからくることがあります。病院が少ない地域の方は小樽の病院に来た帰りに帰るケースが多いそうです。

## 両親の店を継ぐまで

「カネイ商店は三角マーケットにあった小柴鮮魚店から続くお店ですね。お店を継いだ経緯を教えてください。」  
武田さん…小柴鮮魚店は昭和38年に三角マーケットで開店しました。私は高校卒業後、就職しましたが父が亡くなったのを機に実家に戻り店を手伝うようになりました。そこで、私は妙見市場に武

## まとめ

「今回のインタビューを通して分かったことがある。それは中央市場は地域の方によって支えられ、お店の方も地域に還元しようとしていることだ。しかし、今は若いお客さんが圧倒的に少ない。何とか若いお客さんが増え、中央市場がさらなる発展をすることを願いたい。」

【参考文献】「小樽市場物語 第4部ひと模様 中央市場⑨ 後継ぎにこそ心意気」【北海道新聞】（2001年11月6日付）



中央市場（第3棟）外観



カネイ商店

田商店というお店を出しましたが2年で閉店してしまいました。母が体を壊したことで本格的にカネイ商店を継ぐことになりました。その後三角市場から中央市場に店を移し現在に至ります。

## 移転した理由

「市場を移した理由、また中央市場と三角市場の違いについて教えてください。」  
武田さん…中央市場は地元のお客さんが中心、三角市場は観光客の方が中心の市場です。三角市場に店があったところはカネイ商店のお客さんと観光のお客さんの両方に対応しなければいけないため大変でした。また、何よりも家賃が高かったことが大変だったと思います。今ではほとんどの方が地元のお客さんです。

## 地元のお客さんに支えられている

「カネイ商店を継いでからおよそ20年が経ちましたが、仕事をしていてぶつかった困難について教えてください。」  
武田さん…仕事を継いではずと困難です。うちでは生ものを扱っているのせいで、2日しかもません。なので、地元のお客さんが買ってくれているからこそ続けられていると思います。



インタビューの様子



インタビュー後に記念撮影

チーム07  
小寺 健介・小玉 慧流・後藤 樹紀・後藤 正也

# 稲北の大衆食堂

「龍鳳のおかみさんに聞く」

おた かずこ  
太田 和子 さん  
龍鳳勤務



## プロフィール

昭和25（1950）年、青森県つがる市生まれ。同47年、結婚を契機に小樽へ移住。同52年、夫の太田洲雄さんが「龍鳳」を創業。平成6（1994）年、現在地に移転。同11年から息子の友樹さんと共に厨房に立つ。同16年、洲雄さんが、祖父が昭和24年に創業した花園の大丸ラーメンを継ぐことになったため、友樹さんが店主となる。

け焼そばが出来上がりました。

## 三世代に渡るお客さん

「お客さんの年代を教えてください。」  
太田さん…幅広いです。私たちがやってた頃の最初のお客さんがもう70、80になっています。そのおじいちゃんに連れてこられた子どもが今50代くらいになるかなあ。そしてその50代の子どもが今ちょうどあなたの方の年だから、三世代のお客さんが来ます。

## 常に変化し、その時代に合ったものを

「今後どのように龍鳳を経営していきたいとお考えですか。」  
太田さん…やっぱりその時代にあったものを作っていけば間違いないですよ。焼そばもなんでもその時代時代で動いてるような、常に変化してるとんたていう感じ。それにばかり固定するんじゃないくて、これが駄目ならまた違うものをつていう感じでやっていきたいです。

## まとめ

「小樽に長く腰を据え、約40年間、老若男女問わず多くの人に愛されてきた龍鳳。今回のインタビューを通して、太田さんの独自の目線で語る小

近年、小樽では寿司と並んであんかけ焼そばが絶大な人気を誇る。今回、私たちは、バラエティ豊かな創作あんかけ焼そばが人気の稲北の大衆食堂、龍鳳の太田和子さんに話を伺った。

## 青森県出身、結婚を期に小樽へ

「太田さんは青森出身とお聞きしましたが、なぜ小樽に来たのでしょうか。」

太田さん…結婚で青森から小樽に来ました。花園の大丸ラーメンがうちの旦那の実家なんですけど、最初の頃はラーメン屋を手伝っていました。今は龍鳳一本で、息子と二人でやっています。

## 開店当時の龍鳳

「お店を始めた当初のお話を教えてください。」  
太田さん…花園と違ってこの場所はラーメン一本じゃ商売できない場所なんです。人口少ないですし、味濃いい。だからお客さんが「いやお母さん悪いけどどん作ってくれ」って言ったら、うどんを冷蔵庫の中に入れておいてうどんを作ったり、「今日魚の煮つけあるよ」とか、焼き魚とか、定食の付け合わせにそうめんを茹でてやつたりとか、ラーメンにこだわらないでお客さんの食べたいものを提供して、そういう土台をつつたんです。だから最初から中華食堂という方向性

ではありませんでした。青森の人ってなんでもあるものを与えて作って出して、それでお腹いっぱい食べさせてあげたいんですよ。

## 龍鳳のメニューができるまで

「龍鳳にはバラエティー豊かなメニューがありますが、そういったメニューはどのようにお考えになったのでしょうか。」

太田さん…息子が昔、札幌のホテルニューオータニで修行してたんですよ。お父さんが大丸ラーメンに戻ることにって、じゃあこの店どうするかってなったときに、ホテルやめてこっちに来たんですよ。それで龍鳳を継ぐんだつたらニューオータニの味、薄い、量少ない、高いとかにはできない。あとニューオータニっていったら品のいいお客さんばかりじゃないですか。そういうのすべて棄てる気持ちで龍鳳をやれつてお父さんに言われて。お父さんからいろんなこと学んで、よしじゃあ今度自分のホテルで修行したことを生かしてやってみたってなったんだよ。そのときにニューオータニの親方さんが中華だからって中華にこだわるんじゃなくて和食の素材も取り入れるようアドバイスしてくださって、ホテルでの修行を活かしつつ、息子が自分で工夫してメニュー作っていました。今ではそれで14種類以上のあんか

樽の様々な姿を教えてください、小樽の新たな一面を知ることができた。これからの龍鳳のさらなる活躍に期待したい。

【参考文献】北室かず子「いとしの大衆食堂 北の味わい32店」（北海道新聞社、2013年）



インタビューの様子



龍鳳は梁川通り沿いにある。梁川通りと交差する龍宮通りから北側、龍鳳付近は稲北と呼ばれるエリア。



龍鳳は平成 24 年から「小樽あんかけ焼そば親衛隊」の協力店となっている。



龍鳳オリジナルのあんかけ焼そばが連なるメニュー表。

チーム 08

駒井孝成・酒井夢・坂本京香・佐々木彩音

## 日銀支店長御用達 理容店から見た小樽

えつちゅう じゅうご  
**越中順子さん**

元越中理容所



### プロフィール

昭和12（1937）年、小樽市色内生まれ。父・勝二が同6年に創業した越中理容所を継ぎ、平成23（2011）年に閉店するまで、約50年間店長をつとめた。越中理容所は歴代の日本銀行小樽支店長が通った理髪店として知られる。小樽理容師協同組合女性部長をつとめた。

海が見える町、小樽。元日銀小樽支店の建物が物語っているように、歴史ある町だ。今回、私たちは元日本銀小樽支店長が通っていた「越中理容所」の店長をなさっていた越中順子さんにお話を聞いた。

### 生い立ちとは

―越中さんの生い立ちについて聞かせてください。  
**越中さん**…父は石川県の宇出津（うしつ）というところで生まれました。父が13歳のとき、両親が亡くなって、船に乗り、汽車に乗り、叔母の家がある小樽にやってきました。父は叔母の「青山理髪店」に弟子入りし、理容師として生活し始めました。やがて理髪店の支店が北海道ホテルに入り、父はそこで働くようになります。そこで電話交換手をしていた女性と知り合い、結婚します。私は3番目の末っ子として二人のもとに生まれました。

### 越中理容所の開店

―越中理髪店について聞かせてください。  
**越中さん**…父と母が結婚して、父が独立しました。そうして開業したのが「越中理容所」です。上の二人の兄は跡継ぎから逃げてしまったので、結局私が継ぐことになりました。私が店長をやっていたのが約50年ほどで、「越中理容所」は82年間の

営業でした。最後は仕事に飽きてしまつて、やめました（笑）。

私の夫は店の職人さんの親戚で、最初は小樽で5年ほど修行するというところでうちの店に入ってきたんです。昭和35年に私たちは結婚しました。「どうしても結婚してほしい、してくれなかったら自殺する」なんて言われましたよ（笑）。昭和40年には夫が「スカルプチェアカット」の北海道大会で優勝しました。店の営業終了後、深夜1時〜2時まで練習して、体はやせ細ってましたね。

### お客さんから聞いた小樽の話

―お客様から聞いた小樽に関する面白いお話はありますか。

**越中さん**…銀行街に店があつたので、支店長が転勤になるたびに見送りをしていたんです。本当に支店長のみなさんとは深いつながりがあつたんですよ。銀行が近くにあるもんだから、いつも冗談で「うちの裏に日銀があるから、日銀の金庫を狙って穴掘ろう」って言うんです（笑）。

### カール・コッフさんの時計

―カール・コッフさんの時計がお店にあつたと聞きましたか。

**越中さん**…外人坂という坂がありまして、そこを

下つたところにドイツ人の方が住んでいたんです。それがカール・コッフさんです。その奥さんが一週間に一回、理髪店に来て髪を結うんです。そのことはよく覚えていますよ。

カール・コッフさんが終戦で小樽から故郷に帰るときに時計を売っていったんです。それが、うちの玄関にある時計だと伝わっています。うちの親が買ってきてお店で使っていたのですが、まだ大事にしています。15分に一回音が鳴るんですけど、ロンドンのウェストミンスター寺院の鐘の音なんです。

### 戦時中の小樽の様子

―戦時中のことで覚えていることはありますか。  
**越中さん**…食べるものがなかったですね。タンポポのおひたしを食べたり、デンプンをお湯で溶かしたものに米を5〜6粒入れ、塩をふつたものが主食だったりしました。母たちは子どもを食べさせるのに必死でしたね。米を作っている農家に日本人形や着物をもって物々交換する人もいました。本当は密輸のような罪になるので、警察に見つからないよう、みんな必死の覚悟で食べ物を手に入れようとしていました。

サイレンが鳴ると、6年生をリーダーに集団下校するんです。防空壕なんか、穴を掘って土をか

ぶせるだけのものもでした。爆弾が落ちて来たらおしまいですよ。

親戚の家でご飯を食べていたときの話なんです。が、「空襲だー」と声が聞こえてきたんです。そのとき畑にいた人が撃たれて亡くなりました。私はまだ子どもだったので、のんきに箸を持ったまま外に出たのですが、そのとき、B-29がエンジン止めて降りてきたんです。とても大きかったのを覚えています。その機体は、その後ビルの上にあつた高射砲で撃たれて墜落しました。その破片が店に直撃して大変だったんです。戦争は、私が小学2年生のときに終わりました。

### まとめ

―インタビューを通して、小樽の長い歴史を感じることができた。昔から小樽に住んでいる越中さんから貴重な実体験のお話をたくさん聞くことができ、どんな町の様子が移り変わっていく現代で、小樽の歴史を語り継いでいくことの大切さに改めて気づかされた。

【参考文献】「有 越中理容所 創業75周年・お客様の集い催す」『経済興信情報』（2006年5月21日付）



インタビュー中の様子



越中理容所付近の地図。手書きで理容所、旧日銀小樽支店、実家など周辺の様子を描いてくださった。



越中さんご夫妻。お二人が会話する様子を見ると、不思議と心が暖かくなる。



カール・コッフさんが所持していたと伝わる時計。15分ごとに教会の鐘の音を鳴らす。

チーム 09

佐々木龍一・佐藤星吾・佐藤唯衣・菅原大雅

# 小樽の歴史的建造物の 研究と保存・まちづくり

こまき さだまさ  
**駒木 定正** さん

北海道職業能力開発大学校特任教授



## プロフィール

昭和26（1951）年、釧路市生まれ。近畿大学で建築史を学ぶ。同52年、美唄工業高校教諭として赴任。運河保存運動、ポートフェスティバルに参加。同58年、小樽工業高校に赴任。平成2（1990）年、北海道職業能力開発短期大学校講師となり、同大学助教授、教授を歴任。同4年、小樽市の歴史的建造物実態調査に参加。同26年、小樽の歴史と自然を生かしたまちづくり景観審議会会長に就任。小樽市文化財審議会会長、北海道文化財保護審議会委員。

いて、一般の人に伝えることです。そして自分のしていることが研究になっているかどうかを第一に考えています。その価値を一般の人に理解してもらって、上手に利用して欲しいのです。しかし、価値を広めてはいるが、分かってもらっているかは疑問に思っています。まちも同じ時代のものばかりだと次の世代のときに同じように傷んでいきます。いろいろな世代のものが複層し、「まちの年輪」のように建物があるとわかて出来たまちではないという証になります。価値付けだけでなく、どう残していくかが課題です。小樽のまちの魅力、自分たちの感性で考えて、本当にこれでもいいのかということを考える必要があります。

## まとめ

―駒木さんへのインタビューを通じて小樽には、大正時代からの時代の変化が建物によつて今も残っているのとても貴重なことであることに気付いた。小樽の歴史文化は奥深く、歴史的なものを残す取り組みと新しいものを取り入れていくバランスをとることは大変難しいことを感じた。駒木さんは堺町通りなどの歴史的建造物が立ち並ぶ観光通りなどを小樽の街並みとしてどのように思つか、訪れた観光客にどう思ってもらいたいかなどを小樽商大に通う学生自らが、考えることが大

時代の変化にともない建物も変わっていく。今回私たちは小樽の歴史的建造物を長年研究し、建築保存運動でも積極的に活動なさっている北海道職業能力開発大学校特任教授の駒木定正さんにお話を伺った。

## 北海道と関西の文化の違いに驚き

―なぜ近畿大学で建築学を学ぼうと思ったのですか。駒木さん…最初は建築家になったかったのです。近畿大学で建築を学ぼうと思ったきっかけは高校の修学旅行で京都に行ったとき、北海道と関西の文化の違いにカルチャーショックを強く受けたことです。周りの環境、歴史的背景、建物のスケールも大きく、ここにいる間に勉強できることをしとかなないと損だと考えました。加えて、設計の勉強もしたかったが、この地にいるのに建築史を学ばなきゃもったいないとも思いました。近畿大学では、教科書に基づいた授業だけでなく、自分の意見をはっきり述べる魅力的な建築史の先生もいました。卒業後の進路はある建築会社に内定も貰ってはいましたが、最終的に教師の道に進んだのは、もう少し研究をしてみたからです。親にも迷惑かけられないし、大学院に進んだらお金もかかります。高校教諭はお金も稼げるし、専門の勉強も出来るからということで教師の道に進みました。

切だとおっしゃった。最後に駒木さんは私たちに問いかけた。「私は運河保存運動などで古い物をちゃんと生かしたまちにしたいという気持ちで活動してきたが、今は皆それを忘れかけてきているのではないだろうか？」

【参考文献】「日曜インタビュー 駒木定正さん」『北海道新聞』（1998年、2月22日）、「婦化人（9） 小樽こたわりのライフスタイル 駒木定正氏」「小樽學」（2010年6月号）



広告物条例制定により成功した例。建物の上に看板がほとんど設置されていない。

## まちの景観をどうしていくか

―小樽の歴史と自然を生かしたまちづくり景観審議会の活動について教えてください。

駒木さん…審議会は昭和57（1982）年から活動開始し、私は平成4（1992）年に加入しました。活動は以前のほうが活発でした。活動内容は、何を市の歴史的建造物に指定するべきかという議論などです。小樽を代表する建物だとしても地域によつて建物の質が違います。商大の辺りにあったら普通と思われる建物も、銭函にあつて珍しければ、これは銭函の歴史的建造物になる。あとは、まちの中にある記念樹木の選定やまちの景観をどうしていくか、まちの色をどうしていくかの条例のベースをつくっています。屋外広告物の条例も審議会で決めました。この条例の成功例は、駅前から運河にかけてのところに広告塔がないことです。堺町と警察署の前のローソンの看板の色が少し違うのは、条例で色をコントロールしているからだと思います。

## 歴史的建造物を活用するために

―歴史的建造物の有効活用にあたり大切にしていることと、その価値を広めるための課題は何ですか。駒木さん…建物を研究して、建物の情報を噛み砕



警察署前の新設されたローソン。条例により色が調整されている。

チーム10  
高塚なつみ・鈴木志歩・須田朱音・高島拓望

## 佐々木銃砲火薬店の仕事

さ さ き とおる

### 佐々木徹さん

元佐々木銃砲火薬店



#### プロフィール

昭和17（1942）年、小樽市花園生まれ。同店五代目。同店は明治19（1886）年に信香町で創業。小樽駅前を経て昭和19年に花園銀座商店街に移転。爆薬や花火製造、道内各地の花火大会に関わる。平成24（2012）に創業126年で閉店し、北海道煙火株式会社となる。小樽職人の会、北海道職人義塾大学の立ち上げに関与。

私たちは元佐々木銃砲火薬店五代目店主である佐々木徹さんに小樽のイベントと花火についてのお話を伺った。佐々木さんは昭和17（1942）年、小樽市花園町で7人兄弟の末っ子として生まれた。小樽生まれの小樽育ちの佐々木さんは、小樽について語るとき、とても楽しそうで話が止まらないほどだった。

佐々木銃砲火薬店は、明治19（1886）年に創業した。初代店主は佐々木さんの祖父であり、その後佐々木さんの父、兄が継ぎ、五代目の佐々木徹さんで幕を閉じた。

#### 銃砲火薬店とは

「佐々木銃砲火薬店が創設された経緯を教えてください。」

佐々木さん…明治以降様々な目的で北海道の奥地に来る人がたくさんいました。北海道には小樽が函館から内陸に入っていくことが特に多かったのですが、函館は遠いし、けもの道だったので小樽から北海道に入る人が多かったのです。当時、北海道には狼や熊がいたため、小樽に来た人たちはまず佐々木銃砲店から鉄砲やピストルを借りて、撃てるように訓練を積んでから目的地向かっていきました。北海道では開拓にダイナマイトを使用しましたが、佐々木銃砲火薬店ではそのダイナ

マイトも取り扱っていました。その内、開発が進んでダイナマイトを使わなくなっていたので、佐々木銃砲火薬店の商売も鉄砲から花火に移行していきました。のちにはあちこちのお祭りで花火を打ち上げに関わるようになり、時には利尻・礼文まで花火を打ち上げに行くこともありました。

#### 潮まつりの花火

「小樽で花火と関係の深いイベントについて教えてください。」

佐々木さん…小樽では様々な祭礼やイベントで花火が打ち上げられます。日本人は花火が好きなので、「花火をやる」というとそれを見に来るお客さんがたくさんいます。潮まつりでは金曜日と日曜日の二回、観光客の呼び込みのために花火を打ち上げます。

#### 大きな花火を連発できる

「潮まつりの花火の特徴はどこなところでしょうか。佐々木さん…札幌の豊平川の花火などは保安距離が短いことが原因で、あまり大きい玉を打ち上げられません。それに斜めに打ち上げることも安全面を考慮してできません。なので、真上に打ち上げる必要があります。それに比べて、潮まつりでは第三埠頭と色内埠頭の保安距離が200メートル

もあるので、大きな花火を連発して打ち上げたり、工夫した花火を打ち上げたりすることができそうです。そのため、花火を打ちあげる側としては潮まつりのような保安距離が大きいほうが打ち上げる際にも安心ですね。

#### これ以上ない幸福感

「佐々木さんにとって「花火とは何か」を教えてください。」

佐々木さん…たくさんのお客さんが来てくれて、「わあー」って歓声が上がったときには嬉しく、これ以上ない幸福感があります。それに、花火を打ち上げた後には「今日も事故なく無事に上がってよかった」という安堵を与えてくれるものです。

#### 小樽職人の会とは

「小樽職人の会について教えてください。」

佐々木さん…今までの職人たちは同業者のみで組合を作っていたので、異業種の職人たちが集まったというのは小樽が初めてだったんですよ。私たちもこの会を作ってからそれを知って驚きました。その後、苫小牧や帯広、室蘭など30程度の地域が、「似たような集まりを作りたいから」と資料をもらっていききましたが、どこも結局できませんでした。今はハンカチや箸、ブローチなどの製

作体験をやっています。1時間30分ほどしかないので、職人が7割方仕上げて残りの3割を体験してもらっています。その中でものを作る喜びを感じてもらおうと思って活動しています。年間7千～8千人が体験してくれています。この活動が小樽の観光地としての役割を担っているとは思っていませんが、体験してくれた人の内、1人でも職人の技を継ぎたいと思ってくれる人がいれば良いなと思っています。

#### まとめ

「今回のインタビューを通して、佐々木銃砲火薬店の仕事、そして、小樽の花火やイベントの関わりや花火の歴史について沢山のお話を聞くことができました。また、佐々木さんにとっての花火とは何か、佐々木さんの小樽の若者への期待についても語ってくれた。この地で生まれ育った彼が話す小樽や小樽の市民はとても魅力的であり、地域の人々に強く愛されているまちであることが感じられた。」

【参考文献】「創業126年・佐々木銃砲火薬店 閉店」「北海道新聞」（2012年4月18日付）、「佐々木銃砲店 社長 佐々木徹さんに聞く「花園さんば」」（2014年10月）



インタビューの様子



佐々木銃砲店外観

チーム11  
高橋あかり・竹内将馬・立花悠凱・田森ひなの

## 市役所職員として 小樽のまちづくりに関わって

さとう せいいち  
**佐藤 誠一** さん

小樽商工会議所業務推進役



### プロフィール

昭和30（1955）年、小樽市生まれ。潮陵高校卒。北海学園大学法学部卒業後の同55年、小樽市役所に就職。平成16（2004）年、小樽市経済部主幹を務めていた時、「ガンガン屋台」の企画に関わる。その後、観光振興室長、議会事務局長、産業港湾部長などを歴任。同28年、小樽市役所を定年退職。現在、小樽商工会議所につとめる。

今回、私たちは、小樽市職員に務めていた頃、「ガンガン屋台」や築港再開発事業などの様々なまちづくり事業に関わった佐藤誠一さんにお話を伺った。佐藤さんは市役所を定年退職後は小樽商工会議所で事業推進役として勤務されている。

### 「ガンガン屋台」とは

―平成16（2004）年に開催された「ガンガン屋台」に携わったと聞きましたが、具体的にどのようなイベントだったのでしょうか。

佐藤さん「ガンガン屋台」は中央市場の「空コマ」が増えたため、国の支援を受けた市場活性化事業として企画されました。雪あかりの路期間に合わせ開催し、市場と協力して海鮮丼や海鮮鍋、焼き物などを提供しました。「ガンガン屋台」という愛称は、「ガンガン部隊」という戦前・後に中央市場で魚などの生鮮品を仕入れ、小樽駅から内陸の産炭地へ行商に出た女性たちを指す言葉から名づけられました。予想以上に人が来て、10日間の売り上げは相当な金額に上りました。仕事の一環として関わったのですが、個人的にも熱が入りました。残念ながら「ガンガン屋台」は翌々年休止してしまいましたが、またこのような企画を実施されればと思っています。

### 人口減対策と

「マイカル小樽」（現・ウイングベイ小樽）

―築港再開発事業と「マイカル小樽」の計画について教えてください。

佐藤さん「小樽市では人口減少が早期に現れ、30年間で人口が5〜6万人も減少してしまいました。そこで、商大生を対象にアンケート調査を実施したところ、小樽にはアルバイト先がなく、遊ぶところも少ないという回答が得られました。そこで計画したのが、「マイカル小樽」でした。「マイカル小樽」は、小樽市の土地区画事業の一環として建設された商業施設と宿泊施設などが複合された施設です。ここに民間が600億円、小樽市が150億円程度つき込み、小樽の人の雇用を生み出そうとしましたが、札幌からの雇用が多くなり、結果的にあまり多くの地元の雇用を生み出すことができませんでした。

### 現在の仕事について

―佐藤さんは商工会議所ではどのようなお仕事をされているのですか。

佐藤さん「小樽商工会議所では、小樽市の人口減少を受けて、既存の地域中小企業と街の活力を取り戻し、小樽の将来を支える若年者の雇用の場の確保と環境作りを推進することを目的として活動

料バスを出すなど、企業に対して積極的に補助金による支援が必要になってくるとしています。

### まとめ

―このインタビューで私たちは、「小樽のまちづくり」をするということとはただ観光客が来てくれればそれでよいのではなく、その観光客を明るく受け入れる市民を育てていかなければならないということが理解できた。人口が著しく減少している小樽で、若者が流出してしまうのを防ぐためにどのような政策をしていくのが今後の鍵となると思われる。

【参考文献】「中央市場にガンガン屋台 行商のにぎわい再現」『北海道新聞』（2004年1月7日付）



「ガンガン屋台」の際、少ない資金で中央市場が賑わっていた頃の様子を再現した。一斗缶の上に発泡スチロールを貼り付けたイスなど手づくりの物が多い。



小樽市の現状や自身の仕事について資料を使いつつ熱心に説明してくださった。



チーム12  
丹代 義人・寺澤 朋花・寺下 野乃花・巴 彩華

# 都通りの大衆食堂

「桂苑のおかみさんに聞く」

さわだ ふみこ

澤田 富美子さん

桂苑創業者の妻



## プロフィール

昭和12（1937）年、樺太（ユジノサハリンスク）生まれ。同14年、小樽へ移住。夫の澤田満雄さんは、東京出身で戦争時に大空襲に遭い北海道へ移住。同39年、「桂苑」を創業。平成18（2006）年、創業者の満雄さんが引退。長男・初さんが店主となる。同26年、創業50周年を迎えた。

すると開店前から店の前にお客さんが大勢並び、あつという間に300食は完売しました。しかし、この店を50年も続けてこられたのはお客さんのおかげであると、赤字覚悟の上、70円で作り続けました。今振り返ると、当日は大変だったものの、しっかりお客さんに感謝を伝えることが出来たのではないかと思います。

## まとめ

―このインタビューを通じて分かったこと、考えたことは、富美子さんの夫の満雄さん、長男、次男をはじめ、店員、小樽の人々や国内外からの観光客など様々な人たちの支えがあったからこそ、都通りの多くの店が閉店していった一方で、現在に至るまで長期間店を続けてこられたのではないかとということである。富美子さんは、二人の息子である初（はじめ）さんと忍（しのぶ）さんにこれからの「桂苑」の行く末をとっても楽しみにしていた。私たちもこれから「桂苑」がより一層繁盛していくことを期待したい。

【参考文献】「小樽「桂苑」28日50周年」『北海道新聞』（2014年11月28日付）

平成26（2014）年に創業50周年を迎えた都通りの大衆食堂「桂苑」。今回、私たちは「桂苑」の創業者である澤田満雄（さわだみつお）さんの妻であり、「桂苑」を創業当初から支えてきた澤田富美子（さわだふみこ）さんにインタビューを行った。

## 桂苑の味

―お店の味について教えてください。

澤田さん…もともと中華料理は中国人の林さんに教わったのですが、お店の味は大将が考えたオリジナルです。その中でも私のおすすめは、みそラーメンです。このみそラーメンには隠し味が入っていて、味ではほかの店には負けない自信があります。

## あんかけ焼そばの味

―あんかけ焼そばの味についても教えてください。

澤田さん…最初お店で出していたあんかけ焼そばの味は塩味でした。でも私は塩味のあんかけ焼そばが好きではなかったので、しょうゆ味のあんかけ焼そばをお昼につくってお店で食べていました。それをみたお客さんがしょうゆ味のあんかけ焼そばも食べたいと言ったことがきっかけとなりお店でしょうゆ味のあんかけ焼そばを出すようになりました。

## 都通りの今と昔

―昔と今で都通りはどのようなところが変わりましたか。

澤田さん…昔、都通りにはアーケードがなく、通りに沿ってスズラン灯がありました。お店としては、ダンスホールや「電気館」という名前の映画館があり、深夜の2時まで映画を上映しているくらいにぎわっていました。そのようなこともあり、当時は「電気館通り」とも呼ばれていました。また、その影響もあり、「桂苑」も夜遅くまでお客さんがたくさん来るので大忙しでした。お店を閉めた後は「神仏湯」という深夜2時までやっているお風呂に行くことが多かったですが、忙しすぎて行けない時もありました。古くから都通りで店を続けてきたお店のうち、かなり多くが閉店してしまいましたが、残っているお店とは今も仲良くさせてもらっています。

## 創業50周年を迎えて

―平成26（2014）年に迎えた創業50周年記念について教えてください

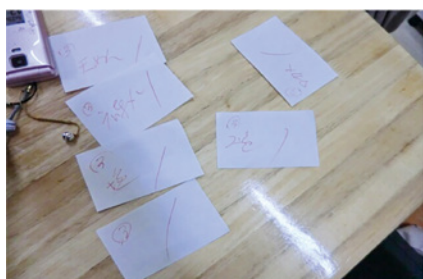
澤田さん…その年の11月28日は、日頃の感謝として塩、醤油、味噌の3種のラーメンを限定300食70円、他のメニューは100円引きにしました。



人気メニューのあんかけ焼そば



桂苑外観



注文の書き方



インタビューの様子

チーム13  
長井 優作・中島 諒磨・中村 裕美・中山 虹希

# 名物女将が見た小樽

すえおか むつみ  
末岡睦さん

元酒亭「すえおか」、  
文学資料室「地獄坂」オーナー



## プロフィール

大正14（1925）年、小樽市潮見台生まれ。北海道庁立小樽高等女学校卒。昭和17年、女子英学塾（現・津田塾大学）に進学し英語を学ぶ。翌18年、小樽に帰郷し、石炭を扱う会社に勤務。昭和42年、酒亭「すえおか」を花園で開業。同63年富岡に移転。同店には小樽の政財界の有力者や運河保存運動関係者など様々な人たちが集った。平成24（2012）年、閉店。同25年、文学資料室「地獄坂」をオープン。

末岡さん…そうですね、当時、小樽を札幌のベッドタウンにしようという提案もありました。でも、当時の小樽は人口も現在よりはるかに多く、早くから小樽高商ができていたこともあり、小樽市民には強いプライドがあったんですね。それで、ベッドタウンにはしたくないという世論になりました。当時の志村和雄市長は、「観光で飯が食えるか！」と、あくまで札幌との経済的つながりを強化したがつていましたけど、その後、余暇開発センターが出て、観光業が発展し、徐々にそれらが景気の回復にも繋がっていきました。この余暇開発センターの理事長を初めて務めたのは佐橋滋さんという方ですが、いつも熱心に活動されていきました。とても立派な方でしたね。

## 小樽への思い

―昔の小樽と今の小樽で違う点は何だと思いますか。  
末岡さん…違う点はたくさんありますが、まず言えるのは交通の便ですね。私が学校に通っていたときバスは一線しかなくてとても不便でした。札幌との距離を何とか縮めたいという思いが「道道臨港線計画」につながったのかもしれない。あと、昔の小樽には鯉料理屋さんが多かったのがとても印象に残っています。格式の高い料理屋さんが多かったなあと今になって思いますね。海に

今回、私たちは、元居酒屋女将で、現在、文学資料室「地獄坂」のオーナーである末岡睦さんにお話を伺った。自身のルーツになっているとおっしゃる学生時代について、そして運河論争についてなど、興味深いお話を聞くことができた。

## 小樽から女子英学塾（現・津田塾大学）へ

―末岡さんは女子英学塾（現・津田塾大学）ご出身ということですが、小樽からこの大学に進学した経緯について教えてください。

末岡さん…当時、私たち女性はそもそも大学を選ぶことができませんでした。小樽高等商業学校（現・小樽商科大学）の受験資格も無かったんですよ。選択肢は、花嫁学校か、先生になるための師範学校か、私立では女子英学塾などわずかしかなかったんです。行きたい私立大学は元々あったのですが、ほとんどが女性に受験資格がありませんでした。当時の風潮ですよね。少しいやな理由だけけど、私が女子英学塾に通うことにしたのは正直言って自分の意思というよりは当時の社会状況の影響が大きいのです。このことが私の原点の一つになっています。

## 運河論争について

―末岡さんの居酒屋には運河論争当時、様々な立

近いのには鯉料理とは、今となっては不思議ですが。

―末岡さんの今の小樽への思いを教えてください。

末岡さん…前の質問の新たな答えにもなるのでしようが、昔の小樽には活気があり、たくさんの方の豪邸が立ち並んでいて見事な景観でした。今は残っていたそれらの建物のほとんどが取り壊されてしまい、その跡地に別の建物が新たに作られています。美しい外観の建物が続々と取り壊され、趣に欠ける現代風の四角い家が増えていくところが特に昔と大きく違うところですね。現在の小樽では、歴史的建造物は観光資源として重視されていますが、やはり維持費を捻出することは難しいことなどから、次々に取り壊されていつている状態にあります。それがとても残念に思っています。

## まとめ

―長い間、小樽に住んでいらつしやる末岡さんならではの話をたくさん聞くことができた。このインタビューで昔の古き良き小樽をあらためて見つめ直すことは、現在とても重要なことであるとメンバー全員が実感できた。お忙しい中取材にに応じてくださり、感謝いたします。

【参考文献】「昨年閉店 市内の名物居酒屋「すえおか」 文学資料室に

場の関係者が多数来店していたと伺いました。運河論争に関わった方など当時の状況について教えてください。

末岡さん…当時の小樽では、札幌との経済的つながりを強化することで小樽の景気を回復しようとするなどを目的に運河を埋め立てて道路を整備する、「道道臨港線計画」が持ち上がっていたんです。この計画に反対したのが「小樽運河を守る会」でした。この会の初代会長を務めたのが郷土史家として著名だった越崎宗一さんです。越崎さんは最初に運河が埋め立てられることの問題に気がついて保存運動をはじめた方で、運河保存運動を語る上で欠かせない存在です。一方、当時の小樽市役所や北海道新聞は、「道道臨港線計画」の意義を盛んに主張していました。国のお金で道路ができるということをとっても歓迎していたように思います。小樽の経済を回復するには道路ありきという主張でした。当時、運河論争に対して比較的冷静だったのが、小樽商科大学と共産党でした。両者は静かに見守っていたような印象がありますね。

## 当時の小樽の景気回復策

―当時の小樽の景気回復策について、他にも教えていただけますか。

再生「北海道新聞」（2013年8月27日付）



インタビューの様子

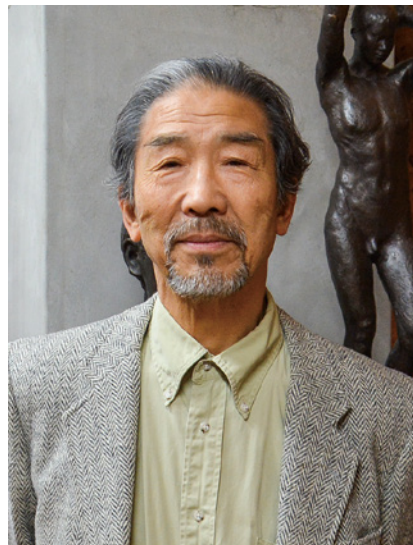
チーム14  
野村つかさ・野口佑香・梨ノ木亜季紗

## 彫刻家の小樽の街への想い

すずき ごろう

鈴木 吾郎さん

彫刻家



### プロフィール

昭和14（1939）年、北海道芦別市生まれ。樺戸郡月形町で幼少期を過ごす。札幌西高校卒業後、北海道学芸大学札幌分校に進学。彫刻を学ぶ。同40年、第40回道展、新人賞を受賞。同57年から60年にかけて、小樽市都市景観委員となり、小樽運河および長橋バイパス・小樽港旭橋景観形成に参画。小樽潮陵高校教諭、小樽商科大学の非常勤講師も務める。平成27年、「北の聲アト賞」最高賞受賞。フランスのパリと「コルマル」中国鄭州美術館で企画展開催。

今回、私たちは彫刻家であり、小樽潮陵高校や小樽商科大学で教鞭を執られた鈴木吾郎さんにお話を伺った。

### 彫刻家を志したきっかけ

―彫刻を始めたきっかけは何ですか。

鈴木さん…大学に入ってからです。3年生の頃から彫刻の道に進みたいと思うようになりました。―ご自身の作品の中で一番気に入っているものは何でしょうか。

鈴木さん…一つ一つの作品に思い入れがありますので一つを選ぶのは難しいです。

―小樽で美術をやるうとしたきっかけは何でしょうか。

鈴木さん…もともと小樽に憧れがありました。中でも小樽潮陵高校の自由な校風は特別な魅力がありました。昔、校長先生が藪の中をこえて学校に來ていたという話があたりします。

### 生徒に伝えたかったこと

―小樽潮陵高校での教員時代、どのようなことを生徒に伝えたかったのでしょうか。

鈴木さん…生徒の「自立心」を育てるような教育を意識してきました。今の学校は危険を遠ざけようとする傾向があり、失敗することを恐れがちです。しかし、失敗から学ぶこともたくさんあります。私は生徒にはどんなチャレンジすること

薦めてきました。今の時代は空気を読むような時代でしょう。私は自信を持つこと、感動して人間性を豊かにすること、そして自分の考えを持つことを大切にしてほしいと考えています。

### 文化の展望を見渡せるような学生を育成

―小樽商科大学での教員時代はいかがでしたでしょうか。

鈴木さん…商大では文化論を担当していました。最初の週は受講者が40人程度でしたが、回を重ねるごとに人数が増えていきました。のちには大教室が満員で入りきれないこともありました。文化の展望を見渡せるような学生が育つように意識しています。特に物事を深く考える学生を育てていくことが大きな課題でした。

### 運河散策路に込めた想い

―運河散策路に込めた想いはどのようなものだったのでしょうか。

鈴木さん…私は運河保存運動が大きな動きになる前年に小樽潮陵高校に赴任しました。運河を一部保存することが決定してから、都市景観委員に就任しました。運河散策路に込めた想いは「本物志向」です。最初にデザインを提案したときは、お金がかかりすぎると反対されていましたが、プランが建設省技監の目に留まって、最終的には元々の予算の3倍程度にまでなり、予算の心配がな

くなりました。散策路の建設は大変なもので、国内で賄いきれないピンコロ石60万個を韓国から輸入しましたし、仙台や熊本から石を貼る職人と呼んできました。私はデザインを担当したため、運河保存運動の関係者に裏切り者に思われかねないリスクもありましたが、苦勞をすると素敵な人に出会えるものです。ちょっとしたきっかけで交流や仲間の輪も広がっていきます。

### 小樽は文化遺産都市

―これからの小樽に期待することは何でしょうか。

鈴木さん…小樽は芸術に関わる人が多くて、全国まれに見る「文化遺産都市」と言えます。これからは世界中から芸術家や音楽家などに来ていただき創作する「文化村構想」を考えています。小樽の廃校などを利用して、生きた芸術にたくさん触れられる展示スポットや交流の場を作って行きたいと考えています。小樽の観光資源として有名になったガラスとのつながりも大切にしていければと思っています。

### まとめ

―鈴木さんはインタビューの数日前まで個展を開いており、二回目のインタビュー後には中国へ行くなど、お忙しい中時間を作ってくださいました。小樽を中心に様々なところで活躍されている方のお話を聞くことは、私たちにとっても刺激になった。



【参考文献】「日曜インタビュー 鈴木吾郎さん」『北海道新聞』（1997年3月16日付）、「鈴木吾郎略歴」（JIP）

インタビュー後にチームのメンバー全員で運河散策路を見に行ったが、鈴木さんのお話を聞いたあとに改めてよく見てみると、普段何気なく通っていた散策路も、長い年月とたくさんの人の努力によって完成された小樽の大切な財産であると気づかされた。鈴木さんはインタビューの中で、これからの小樽を担っていくのは若い世代だとおっしゃっている。未来を担う私たちが、もっと地域に深く関わっていくべきだと思った。



インタビューの様子



鈴木さんの作品



アトリエ

チーム15  
松村有呂・水島早希・水間圭次郎・南出彩果

## 小樽と市立小樽文学館

たまがわ かおる  
玉川 薫さん

市立小樽文学館館長



### プロフィール

昭和28(1953)年、福井県福井市生まれ。福井県立藤島高校卒業後、北海道大学文学部へ進学。同52年、東京の医学書専門の出版社に就職するも、「答えが一つの理系には向かない」ことを再認識。同54年、前年に開館した市立小樽文学館の学芸員となる。平成26(2014)年、同館館長となる。

今回、私たちは小樽文学館の館長である玉川さんにお話を伺った。小樽の文学についてはもちろん、玉川さんのユニークな価値観と人間性にも触れることができた。

### 北海道の土地や気候のイメージに惹かれて

「福井から北海道に来た経緯をお聞かせください。玉川さん…北海道の広い土地や気候のイメージに惹かれたためで、特に何をしようといった明確な目的があるわけではありませんでした。札幌に住んでいる間、小樽についてはあまり意識していませんでしたが、就職前に行ってみたとき、札幌とは違う不思議な感じがしました。まるで古い時代のミニチュアであるような時間、時空が止まったパレールワールドでした。一方、五年間住んだ札幌は整然とした街並みで、面白みがなく小樽とは対照的でした。」

### 小樽ならいいかな

「就職は最初は出版社で、それから文学館に移っていますが、その経緯をお聞かせください。玉川さん…自分にできることは小さな出版社でコツコツと本を作ることだと思いました。編集者養成学校に通い、探し回って見つけたのが「メジカルビュー」でした。しかし、医学書専門の出版社とい

うこともあり、自分のやりたいこととは違うと感じ、自分の意見を活かせるところにいきたいと思っていました。そのころ小樽文学館が学芸員の募集を始め、北海道に戻る気はなかったけど、小樽ならいいかなと思い、試験を受けに行きました。」

### 文学館にふさわしい建物

「この文学館の建物はかなり年季の入ったような印象ですが、歴史のあるものなのですか。玉川さん…この建物は僕が就職する前からそのままでの姿なので愛着があります。この建物は、昭和27年(1952)年に戦後初めて鉄筋コンクリートが使われた最先端の建物だったんです。この建物を設計した小坂秀雄は、明るくて広々とし、わかりやすくして単純で重みを感じさせない造りの建物をつくる建築家です。そして彼は建物に個性を出すことなく、自分がつくったというサインもしない。そのような一から十までシンプルな小坂秀雄の思想そのものが好きで、これが文学館にふさわしいと思いました。」

### 小樽の文学は現実を見ている

「長年小樽で暮らしている中で、小樽の文学の特徴など分かってきたことはあります。」

玉川さん…正直今でもあまりよくわかっていない

こともあります(笑)。小樽は商人の町だったこともあり、現実を見ているという印象でした。小林多喜二なんかは小樽らしいですね。

### ドネーション制は欧米をヒントに

「小樽文学館は古本屋とコーヒーのドネーション制がとても特徴的ですが、取り入れる経緯などはあったのでしょうか。」

玉川さん…ドネーション制は欧米では一般的で、そこからヒントを得ました。文学館に好んでいく人はいないと思っています。文学館は美術館などと比べてマイナーな存在でいいですが、自分がお客さんの立場なら一日中文学のみを鑑賞するような場所は嫌ですね。その点ドネーション制度は文学を味わった人が自分で値段をつけられる制度なのでお客さんは面白がつくれるし、そもそもそれが文学館本来の姿だと思っています。」

### 若い人との偶然の出会いを待っている

「最後に、これからの自分のこと、文学館のことと考えていることはありますか。玉川さん…自分は63歳であるので、走り回ったり楽しみながらやってくれる若い人がとにかくほしいですね。偶然の出会いを待っています。それが今、一番心をしています。」

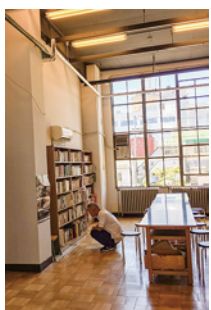
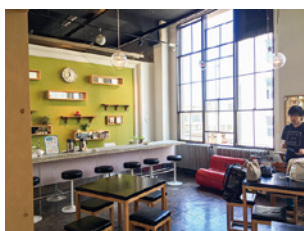
「玉川さんのフェイスブックでは、好きな言葉について樂觀的なことがかいてあるのを拝見しました。どのような思いでそのような言葉を選んだのですか。」

玉川さん…偶然とか失敗とかはそういうものだと思います。嫌なことも含めて人生です。後悔なんてするものではない。とりあえず生き延びることですから。」

### まとめ

「今回インタビューをして思ったことは、玉川さんは文学や小樽に対する様々な思いを抱いているということである。また、玉川さんのユーモアあふれる発想や樂觀的な思考は私たちも見習いたいものであった。また機会があれば話を伺ってみた、そんな風に感じたインタビューであった。」

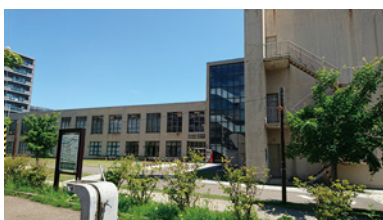
【参考文献】「ひと2000 玉川薫さん」『北海道新聞』(2000年11月22日付)、「帰化人(4) 市立小樽文学館 副館長 学芸員 玉川薫氏」『小樽學』(2010年11月号)、「本を仕事にした人 市立小樽文学館館長 玉川薫」『O・t・one』(2015年11月号)



ドネーション制を取り入れた本と喫茶のスペース。広々と開放的な内装で、居心地が良い。



旧手宮線跡地に隣接する文学館。歴史を感じさせる建物は当時の最先端の技術で建てられた。  
【上】旧手宮線  
【下】文学館建物



写真撮影を快諾してくださった玉川さん。「文学館のなかで守り続けたいのは写真 OK。著作権の侵害にはなりませんよ。」

チーム 16

村口雄大・美馬貴生・森快地・百井彩

# 朝里のまちづくり

なか かずお

## 中一夫さん

北海道新聞中販売所代表取締役  
小樽・朝里まちづくりの会事務局長



### プロフィール

昭和30（1955）年、小樽市花園生まれ。古小牧高専に入学したが中退。同48年、小樽運河を守る会に参加。同会会長の峯山富美さんに励まされ運動に取り組み。同53年、第1回ポートフェスティバルに参加。平成5（1993）年、父の後を継ぎ北海道新聞中販売所代表取締役に就任。同11年、小樽・朝里まちづくりの会事務局長となる。

客数の減少に頭を抱えていたのです。

そこで私は、朝里川温泉組合の方とお話をした際、「観光客には多く来て欲しいが、まずは朝里が一体となって歓迎する姿勢を作る必要があるのではないか。目先の利益よりも、地域とのつながりを大切にしてはどうか」ということを伝えました。そして後日、中心となって朝里の活性化に取り組んで欲しいとのお話をいただきました。こうして私は、小樽・朝里のまちづくりの会を発足させ、朝里を中心としたまちづくりの活動を始めたのです。

はじめこそ多くの困難に直面しましたが、まちづくりの会を中心に、多くの住民の皆さんの支援の下、現在では、朝里川沿いに未来の桜並木を作るための植樹活動、アジサイ公園でのアジサイの植樹活動、朝里を通る北海道道1号線の道路わきに植樹柵を植える「花いっぱい運動」、朝里川におけるリバーサイドフェスティバル&花火大会、冬に行われる朝里十字街雪まつりなどたくさんさんの活動を行っています。

### 人を動かすのはお金よりも熱意

「今日、私たち学生のような若い世代と、地域との関わりが浅くなっていると感じます。そのような世代に向けて、また市民運動の意義も含めて、

現在、小樽市の貴重な観光資源の一つとなっている小樽運河であるが、美しい景観を保ってきた背景には、多くの人々が運河保存のために尽力してきた歴史がある。今回私たちは、運河保存運動に関わった人物の一人であり、朝里に拠点を移して以降、朝里のまちづくり活動に携わっている、北海道新聞小樽市内販売所新光・中販売所社長の中一夫さんにお話を伺った。

### 運河保存運動とポートフェスティバル

「小樽運河保存運動に参加したきっかけについて教えてください。」

中さん「昭和50年頃、私は友人間で結成したロックバンドで、潮まつりへの参加を申請したのですが、当時はまだロックという新しい音楽への情熱において温度差があり、大人たちは相手にしてくれませんでした。」

そこで、私を含めた小樽の若者達が結集して、運河周辺における「小樽ポートフェスティバル」というイベントを企画し、資金集めなど多くの困難を乗り越え、昭和53年に実現させたのです。その時私は、多大なる充実感と共に、何かに一生懸命に取り組み、達成することの魅力に気づきました。そしてちょうどその頃、幼い頃から慣れ親しんできた運河の景色が、港湾流通道路建設のために

メッセージをお願いします。

中さん「4年後に東京オリンピックを控えている日本ですが、オリンピックが成功すると同時に日本は経済的な大負担を抱えることになるでしょう。そうなったとき、2025年までに、団塊の世代が後期高齢者に達すると言われる日本において、社会保障は成り立つのでしょうか？」

さらに年金も減って行き、自分一人だけでは生きられないような時代がきつと来ると思います。そのとき、経済発展を重視する従来の姿勢から、人間関係重視へと考え方を転換していく必要があると思います。そうなったときに、住民同士の関わりは非常に大きな役割を担うでしょう。

そこで皆さんに大事にして欲しいのは、出会った人の恩情に、真剣に食いついていくという姿勢です。人への振る舞いは、そのまま自分に返ってきます。ぜひ出合いを大切にしてください。

最後に、私が様々な人との出会いの中で学んだことをお教えします。それは「人を動かすのはお金よりも熱意である」ということです。お金だけで割り切る運動は底が浅い、お金と心づかいの両方を兼ね備えた運動にこそ、価値があるのです。

### まとめ

「今回の取材を通して分かったのは、まちづくり

失われようとしていることを知り、「小樽運河を守る会」に参加し始めたことがきっかけです。

### 朝里に拠点を移した経緯

「中さんはどのような経緯で朝里に拠点を移されたのでしょうか。」

中さん「当時、朝里が新聞売り上げの伸びている地域であったこともあり、読売新聞に売り上げ数で勝りたい北海道新聞社は、花園の販売所を運営していた私に、朝里に新たな販売所を構えることを勧めたのです。はじめは、長年住んでいた花園を離れることに對して不安や葛藤もありましたが、次第に、経営的に面白いと思いはじめました。読者をいかに増やすかということに関して、様々なアイデアが浮かんできたことで、私は朝里に移り住むことを決意しました。」

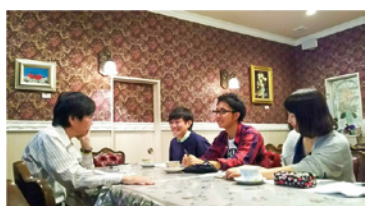
### 地域とのつながりを大切に

「朝里における具体的な活動について教えてください。」

中さん「朝里に移った私はまず、朝里という町について色々な人に話を聞いて回りました。しかし皆が口をそろえて言うのが「良いところだけど、なにもないね!」ということでした。実は、朝里を代表する観光資源である朝里川温泉も、当時来

の会の皆さんが、定年退職後の重い腰を上げて中さんに協力するのは、ひとえに中さんの人柄、そして熱意によるのだということである。朝里というあたたかく美しい町のさらなる発展を願っている。

【参考文献】「日曜インタビュー 中一夫さん」『北海道新聞』2001年2月18日付、「まちづくり運動から学ぶ(29) 中一夫」小樽學『2013年8月号』



インタビューの様子



朝里十字街雪まつり



ドライバーを良い気持ちで招き入れるために、まちづくりの会の皆さんで植えた花と、メッセージ入りの看板

### チーム17

山内日南子・山口怜央・山崎優斗・山田知典

# 北の誉と和光荘

のぐち れいじ

## 野口 禮二さん

株式会社秀映社代表取締役社長



### プロフィール

昭和22(1947)年、小樽市潮見台生まれ。小学2年の時に上京。獨協大学卒。昭和45年、北海道拓殖銀行入行。父が死去した翌年の同60年、30年ぶりに小樽に戻り、酒類卸業の丸ヨ野口に入社。同63年、同社社長に就任。平成12(2000)年、同社を清算。翌年、北の誉酒造取締役就任。野口吉次郎が明治34(1901)年に創業してから四代目にあたる。北の誉酒造は平成28年1月に合同酒精に合併。法人としては消滅した。

らしいものを販売するような活動も検討中です。

### 北の誉について

「北の誉が創業するに至るまでの経緯を教えてください。」

野口さん…四代前の、私の曾祖父にあたる吉次郎は、養子として野口姓になったのですが、昔金沢で、貧農の子沢山の家に生まれ、数回養子に出された後に野口に養子縁組みをしました。明治19年に小樽に入り、着物の行商等しながら生計を立てていました。その後、当時「丸ヨ 石橋商店」で醤油の醸造を始める話を聞いて、製造計画書を持参し、店主に聞き入れられ醤油の醸造を始めました。その出来た醤油の販売を任せられ「丸ヨ」の屋号を頂き丸ヨ野口商店が発足しています。その後、明治34年に丸ヨ野口商店で清酒「北の誉」を製造始めました。

「日本酒の魅力はどのようなところにありますか。野口さん…まず、若者の日本酒離れが顕著で、一時売り上げが3分の1に落ち込んだこともありましたが、「日本酒は口の中がべたつく」、「日本酒はおじさんが飲むお酒だ」といった考え方が根底にあるのだと思います。しかしそんなことはなく、魅力はたくさんあります。日本酒には様々な飲み方があります。例えば、炭酸水で割ったり、カク

100年以上もの歴史を誇る酒造会社である北の誉と、現在も建設された当初から変わらぬ姿を見ることが出来る和光荘。今回、私たちは、元北の誉社長、現和光荘オーナーである野口禮二さんにお話を伺った。

### 和光荘、建設のきっかけ

「和光荘を建設するきっかけは何だったのでしょうか。野口さん…この建物は正11(1922)年に私の祖父が建てたものです。理由としてはつきりと断定できるものはないですが、私の父の兄弟がとても多かったことや、祖父は事業を起こしていたのでそのお客様の接待の時に使用するため、従業員の研修のためなどが挙げられると思います。」

### 和光荘について

「和光荘が宿泊施設として使われていた時期には昭和天皇・皇后が宿泊したことがあると伺いました。その時の状況など、何かご存知のことはありますか。」

野口さん…当時和光荘は「北海ホテル」というホテルの別館として使われていました。その本館のほうは小樽の街中に建っていたので、昭和天皇がそちらに宿泊するとなると警備がとても大変になることが予想されました。だから、観光地や街か

テルとして使ったり。また、5年以上寝かせた日本酒のことを「古酒」と言いますが、それは少し違った香りと色が楽しめます。

「小樽の若者たちに何かアドバイスをお願いします。」

野口さん…若い人たちにはもつと文化的なものや歴史的なものを体験・経験してほしいし、大学生だったら、大学生だからこそできることを今のうちにたくさんするべきだと思います。また、若い皆さんはお酒といえばビールやワインのような外国のお酒を好む傾向にありますが、ぜひ、日本酒の魅力をもっと知ってほしいと思っています。

### まとめ

「私たちはこのインタビューを通して、北の誉の創業から現在に至るまでの歴史の一端を知ることができた。また、私たちは実際に和光荘を訪れて、その魅力をこの目で感じる事ができた。皆さんにも、身近に存在する歴史的建造物である和光荘に、足を運んでみてほしい。」

「小樽 和光荘」HP: <http://www.otaru-wakousou.com>

【参考文献】関正燈「店祖 野口吉次郎の生涯」(私家版、1990年)、「日曜インタビュー」野口禮二さん「北海道新聞」(2004年2月29日付)

らは少し外れたところにある、この建物が選ばれたのだと思います。また、当時はまだ戦後間もなかったもので、危険な思想を持っている従業員などがないかどうか念入りに調査していたそうです。

「和光荘は現在、期間限定で一般公開を行っているのですよね。」

野口さん…そうですね。去年から公開していますが、きっかけは5年ほど前にNPO法人の「れきけん」(歴史的地域資産研究機構)の方から一般公開の提案を受けたことです。ただ、古い建物でスプリンクラーなどがないので、消防の関係で不特定多数の来客を受け入れることができません。よって今は「小樽 和光荘」のHPからあらかじめ予約をしていただいた方しか受け付けておりません。常動してもらええる案内人の方がいないので、日替わりで平日のみおたる案内人の方をお願いします。

### 和光荘の活用

「今後、和光荘をどのように活用していきたいですか。野口さん…多くの方々に和光荘を知ってもらうために、東京や大阪などの観光地にパンフレットを配ったり、新聞社やテレビ番組などのメディアの取材も積極的に受けたりなどの活動を考えています。また、和光荘の中でカフェを開いたり、小樽



和光荘 外観



和光荘 庭園



インタビューの様子

チーム 18  
山羽史織・横山莉花  
LEESangwan・KIM Inyeong

## 戦後樺太引き揚げと小樽

はしもと かつひさ  
橋本 克久さん

小樽再生フォーラム事務局長



### プロフィール

昭和13（1938）年、樺太の留多加町生まれ。同21年、小樽へ引き揚げ。手宮小学校に編入。同31年、桜陽高校卒業後、小樽市内の百貨店・ニューギンザに就職。3年後上京し、大学病院の職員、東京大学、入試センターなどで勤務。平成11（1999）年、定年退職後、小樽へ戻る。同18年、最上町会会長に就任。ペーパークラフト職人としても活躍中。

ここで出されたご飯が非常に美味しかったのを覚えています。

### 樺太と小樽とのギャップ

―南樺太から小樽へ引き揚げた時、南樺太と小樽の間でのギャップとして強く感じたことはなんですか。

橋本さん…地形の違いに最も強いギャップを感じました。住んでいた樺太の豊原は平地だったので最初は山や坂が好きではなかったです。また言葉の違いにも戸惑いましたね。小樽に戻ってから暮らしていた最上町の引き揚げ者住宅は長屋だった建物で、いまでも残っています。

### 当時の小樽の推移

―小樽に引き揚げてきた当時の小樽の様子と、ニューギンザで働いていた頃の小樽の様子に違いがありましたか。

橋本さん…経済的な原因で徐々に勢いが衰えている感がありました。ニューギンザは当時、新興の百貨店で、勢いがあった給料も高かったのですが、客層は丸井今井や大国屋とは異なっていて、庶民や後志方面から来る人が多かった印象があります。他の百貨店とは協定を結んでおらず、闇屋の成り上がりのような感じがありましたが、いつも人で賑わっていました。

戦前、日本の統治下にあった南樺太は第二次世界大戦末期にソ連軍の侵攻を受け、終戦後ソ連の占領下におかれた。南樺太の多くの人々は数年後に小樽へと引き揚げ、その後小樽で定住する者も多くいた。

引き揚げの過程と戦後の混乱の中で樺太引き揚げ者は、占領下の樺太や引き揚げ後の小樽でどのように暮らし、生きてきたか。また、故郷の樺太へどのような思いがあったのか。それを探るべく、私たちは樺太引き揚げ者の一人である橋本克久さんにお話を伺った。

### 生い立ち

―橋本さんの生い立ちをお聞かせください。

橋本さん…樺太の留多加町で生まれ、その後豊原町へ移住しました。戦後の昭和21（1946）年12月小樽へ引き上げ、地元の小学校へ編入しました。高校を卒業した後、地元の百貨店ニューギンザに就職し、3年半働いた後、上京して大学病院の職員や東京大学、大学入試センターで勤務しました。定年退職の後、小樽へ戻り小樽再生フォーラム、ペーパークラフト職人として活動しています。

### 南樺太からの引き揚げ

―南樺太からの引き揚げが決定したときの人々の

### まとめ

―取材をするまでは「今回の取材は暗い内容になるだろう」とメンバーの誰もが予想していた。テーマの関係上、戦争が大いに関わってくるだろうし、そうならば必ず悲惨な体験の話が中心になるだろうと思ひ込んでいた。しかし、それは大きな間違いだった。橋本さんは樺太にいた頃も小樽に移住した後も、苦しいはずの日々の中で必ず何かしらの楽しみを見つけ、決して絶望することをしなかった。もちろん、橋本さん自身が当時は幼く、時代の困難を認識しきれていなかった部分もあるだろう。

いずれにせよ橋本さんは、国同士の政治的な思惑が錯綜する複雑な時代を、日々の小さな楽しみを大切に生きて抜いていた。橋下さんのように、国家単位の対立に縛られずに生きることだって本当は可能なのだということを、領土をめぐる対立や思想的な不和が絶えない現代を生きる私たちは知っておくべきだろう。

【参考文献】「ひと 小樽発 小樽再生フォーラム事務局長 橋本克久さん」『北海道新聞』（2014年7月8日付）、「我ら桜陽人 高校9期卒業 橋本克久」『桜陽会報』（vol.111、2016年3月）

様子や橋本さんの心情はどうでしたか。

橋本さん…悲しい気持ちとかはありませんでした。なにせその頃はまだ小学1年生で、戦争が終わっても何もなかったかのように二期が始まりました。唯一変わったのは、スターリンを讃えるソ連の歌を歌わされるようになったことだけでしたね。大人たちは樺太から引き揚げることでも0からやり直さないとはいけなかったため、相当大変そうに見えました。

### 当時の樺太の様子

―引き揚げる頃の樺太の様子、発展度合いはどうでしたか。

橋本さん…製紙業などの産業が発達していました。豊原は札幌のような行政の町で、甚盤の目をした町でした。戦後、レーニンやスターリンの大きな看板が掲げられ、とても印象的でした。

### 引き揚げ船では

―引き揚げ船に乗っている間の人々の様子や橋本さんの心情はどうでしたか。

橋本さん…感覚的には一晩で着いたような感じでした。船の中は災害から避難したときの学校の体育館のような感じで、周囲は切羽詰まったような雰囲気ではなく、結構明るかったです。また、そ



橋本さんが住んでいた引き揚げ者住宅（最上町）。長屋だった建物の一部がいまものこっている。



橋本さんの昔の写真が収めてあるアルバムを見せていただいた。



橋本さんの自宅に貼られている樺太の地図。

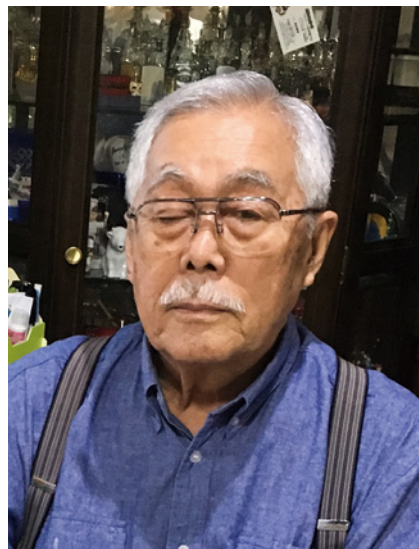
チーム 19

井上優太・相澤龍平・PARK Jinwoo・上野浩輔

## 小樽・後志から ドミニカへ移民

はまや ひとし  
濱谷均さん

カフェ・ミカーサオーナー



### プロフィール

昭和14（1939）年、小樽市緑町生まれ。父の転勤により岩内郡小沢村国富、札幌などに移住。国鉄バス札幌本社に勤務。同33年、戦後日本の国策移民の募集に応じ、ドミニカへ移住。同36年に入植地を脱出、首都サントドミンゴで野菜行商を始め成功。同55年、独立商社を設立。多角的事業を展開。平成10（1998）年、小樽へ戻る。同12年、天神町にカフェ・ミカーサ開店。同年、ドミニカ移民訴訟提訴。同17年、国がドミニカ移民政策の責任を認める判決。賠償は時効。

### ドミニカ時代

「小樽に戻ってきってから商社を結成したそうですね。」

濱谷さん…浜谷商事と言います。今は主にドミニカコーヒーを本場から輸入していますが、私の商社活動の原点はドミニカ時代にあります。

入植地をやつとの思いで抜け出して、首都サントドミンゴで営んだ雑貨店は私にとって転機となりました。商いを学ぶためにドミニカの経理学校にも通ったんですよ。その頃からドミニカでの生活も少し楽しめるようになってきたんです。商談を持ちかけてくれる商社は増え、私の仕事は次第にドミニカと日本を股に掛けたものになっていきました。ドミニカ観光省の顧問として、ドミニカが観光で自立できるように協力していました。

### 46年ぶりに小樽へ

「46年ぶりに小樽に戻ってきてもう思いましたか。濱谷さん…率直に言うと、小樽は変化してないと思いますね。」

小樽に戻ってきてからも何度か地域活性のための現場に参加しましたが、同質な意見が多く活発とは少し言い難いような印象を受けましたね。対等で活発な議論にはできるだけ多様なパツ

今回、私たちが取材した濱谷均さんは小樽に生まれ後志で育つも、戦後日本の国策移民によるドミニカ移民募集に応募し、コーヒー栽培コロニアに入植した。その46年後、再び小樽に戻った濱谷さんはそこで何を見たのであろうか。

### 生い立ち、ドミニカ移住まで

「戦時中の後志での生活はどのようなものでしたか。」

濱谷さん…後志の中でも国富という地域に住んでいました。私は当時小学1年生でしたが、父は国富にある住友の精錬所で職員として働いていました。

古い銅器をとかしてインゴットにして四国へ輸送され、戦争兵器になるんです。国富にも空襲があり、わたしたちはよく防空壕に避難したものです。戦後、事情のわからない私はそこを遊び場にしていましたよ。

「高校時代では様々な活動をされていたようですが、具体的に何をしましたか。」

濱谷さん…私はとても活発な学生だったと思いますね。部活が多く、その中でも私たちは英語クラブを結成しました。スピーチコンテストで米大統領のリンカーンの演説を暗記してスピーチしたのは良い思い出です。それにしても、のちにドミニカに行った時英語クラブで学んだことがスペイン

クグラウンドを持った人間が多く集まる必要があると思うのです。バックグラウンドとは肩書きなどではありません。その人がその人生をどう生きてきたかです。そのような多様性に富む活発な人たちが率先して小樽を盛り上げていてほしいですね。

### まとめ

「約半世紀ぶりに小樽にもどった濱谷さんがどのように感じたのかをお伺いすることができた。学生時代から様々な活動し、日本と外国間の商売を通じたグローバルな視点を持つ濱谷さんの「小樽に変化なし」という指摘にいろいろ考えさせられた。」

【参考文献】「国の過ちを後世に伝えたい ドミニカ移民訴訟元原告 濱谷均さん」『北海道新聞』（2007年9月10日付）、「ドミニカ（棄民）忘れぬ」『北海道新聞』（2015年11月20日付）



CAFE MI CASA 外観

チーム20  
内山 颯斗・工藤 周平・小泉 大樹・高橋 和輝

語習得に役立つことになるんですよ。

画家を目指したのも高校時代です。中学生時代、美術部に入っていたころの絵が児童展に入賞したのがきっかけでしたね。その流れで東京芸大を目指しましたが最終試験の油絵で失敗してしまいました。それでも国富に戻ってからは地元の子供たちに絵画を教えていたんですよ。ドミニカへ移住したのはその翌年のことです。



濱谷さんが小学生時代を過ごした国富国民学校（1940～1950年頃）

## 運河保存運動から 雪あかりの路へ

やまぐち たもつ  
山口保さん

元小樽市議会議員



### プロフィール

昭和22(1947)年、岐阜県金山町生まれ。同41年、生命館大学に入学するも4年で中退。フランス、スウェーデンで3年間過ごす。同50年、小樽に居住。翌年、手宮で喫茶メリーゴーランドを開店。同年、小樽運河を守る会幹事となる。同53年、ポートフェスティバル・イン・オタル創設幹事。平成11(1999)年、小樽雪あかりの路実行委員会事務局長。同15年、小樽市市議会議員となる。同27年、退任。

### 運河の半分埋め立ては最悪の結果

―運河が半分埋め立て、半分保存という結果について山口さんはどう思いましたか。

山口さん…最悪の結果だと思いました。運河を半分埋め立てて道路を作ること結局車どおりが多くなり、街と運河が分断され、倉庫も活用されなくなるだけではなく、昔の銀行建築があり、中心部にも近く一帯経済的に見て価値のある色内大通りに人が行かなくなるので、半分埋め立てしても全部埋め立てしても変わらないと思いました。これは小樽市の大失敗だと思います。この決定の後も運河の全面保存のためにリコールを考えていたが、最後は政治の壁を打ち破れず運河の全面保存をすることはできませんでした。

### 雪あかりの路の立ち上げまで

―運河保存運動か雪あかりの路を始めるまでに10年ほどの歳月がかかりますが、どのような思いで過ごしていたのか教えてください。

山口さん…これまでは運河について話す場として、保存運動の拠点として喫茶店をしていたが目的がなくなつたため、既にやっていた木彫の仕事一本でやっていくようになりました。当時は保存運動の結果がショックで工房のある赤井川に移住しよ

小樽が観光都市化するきっかけになった運河保存運動と小樽の冬の一大イベントである雪あかりの路。この二つの出来事に大きく関わった人物がいる。

岐阜県の金山町に生まれ、欧州各地を回り小樽に移住し、小樽運河を守る会幹事やポートフェスティバル実行委員、雪あかりの路実行委員会事務局長、小樽市議会議員などの役職を務めた。今回私たちは小樽の観光都市化について話すには欠かせない人物であり、サカナクションのボーカル山口一郎さんの父でもある山口保さんにお話を伺った。

### 小樽に來た時の町の印象

―小樽に初めて来たときの印象を教えてください。  
山口さん…小樽に初めて来たのは、昭和50(1975)年12月14日に大学時代の友人である佐々木恒治さんに会いに来たときでした。本州のどの地方都市も個性を失いリトル東京を目指しているような一辺倒な街の姿になっていた中で、小樽はたまたまいが古風でヨーロッパのような都市でした。当時の運河は汚かったが駅から歩いて5分程度着くところにあるということが当時の日本では考えられず、港では船の出入りがなく、みんなが埠頭で釣りをしていてのどかな風景が広がっていました。そんな姿に少し興味がわいてきました。

―と考へたこともあります。しかし、残つた運河を磨いていき、北海道の鉄道の起源である手宮線を活用しなければならぬと思つていました。

### 小樽の文化として残るようなものを

―雪あかりの路を始めるまでの経緯を教えてください。

山口さん…小樽市と協力して小樽観光の調査部会を作り、小樽のその当時の観光の質や現状を調査・研究していく中で、「冬の観光客が少なく」という課題が見つかり、小樽の文化として残るようなものを作るということで、この街でしかできないまつりを考えました。すると北海道唯一のローソクメーカーが小樽にあり、日本で唯一浮き球を作るメーカーも小樽にあるということで、それを活用するしかないと思ひました。電球ではなくローソクを使うことで、まつりを苦勞して運営しているところを人に見ていただくことも重要になると考え、雪あかりの路が生まれました。

### テーマは「癒し」

―今後の雪あかりの路について何か考へていることはありますか。

山口さん…イルミネーションや騒ぐまつりは他所でもできるので、小樽では一年に一回静かに物

### 小樽へ移住したきっかけ

―小樽に移住した決め手を教えてください。

山口さん…やはり一番の決め手となつたのは運河です。ヨーロッパではすでに、運河がヨットハーバーやレストランとして活用されており、その運河を活用すれば、かつて栄えた色内通りがもう一度輝きを取り戻し、小樽を再生できるのではないかなのではないかと思ひ、運河保存運動に参加したのが移住を決めたきっかけです。

### 運河保存運動との関わり

―運河保存運動の中で苦勞したことを教えてください。

山口さん…小樽運河を残すことで小樽が再生できることを伝え、運動に市民、特に若者を取り込むことが課題でした。そこで、当時若者の中心であった佐々木一夫さんに相談し、実際に多くの若者に集まってもらつて、運河の実態を見てもらうとうと、昭和53年にポートフェスティバルを開催しました。自分たちで店を出店するために的屋の代表のところにも交渉しに行きました。このおかげで運河や倉庫の価値が認められ、市民も「これなら運河を残したほうがいいのでは」と思ふきっかけになり、運動が大衆化していきましました。

―思ひにふけることができる場を提供したいと考へています。テーマは「癒し」です。

そして商店街も7時に閉まるのはよくないですし、飲み屋もキャンドルで営業してみてもいいと思います。このように市民一人一人がまつりにかかわることで雪あかりの路が新たな文化になっていくと思ひます。また、現在の雪あかりの路は中国人と韓国人のボランティアに支えられていて、今後のまつりの存続は彼らにかかっています。ですので、小樽の若者、特に小樽商科大学の学生にもまつりを支えてほしいです。

【参考文献】「日曜インタビュー 山口保さん」〔北海道新聞〕(1998年12月6日付)、「ある市民運動の記憶から」(全5回)「Hoppo Journal」(2015年5・9月号)



メリーゴーランド木彫工房

チーム21  
長谷川健仁・本間耕輔・松浦健人

## 手宮のまちづくりイベント

やました しゅうじ

山下 秀治 さん

株式会社ヤマシタ商事代表取締役会長



### プロフィール

昭和28(1953)年、北海道虻田郡ニセコ町生まれ。全国理美容中央専門学校(大学科)卒。同50年、おしやれサロンヤマシタをオープン。同55年(有ヤマシタ商事設立。平成2(1990)年、手宮地区活性化のためイカ電祭りを立ち上げ、実行委員長を務める。同6年、シチズン・オブ・ザ・イヤー賞を受賞。

私たちは、手宮のまちづくりに関わった方々のお話を伺うため、当地区で真夏の風物詩となっていたイカ電祭りの実行委員長を務め、長年にわたり手宮を大いに盛り上げた、山下秀治さんにお話を伺った。

### ニセコから小樽へ

― 山下さんはニセコ町出身ですが、なぜ小樽で活動なさっているのでしょうか。

山下さん…小さいころから他人の髪を切るのが好きでした。だけど、ニセコは田舎。どうすれば理容師になれるかもわかりませんでした。中学3年の11月10日、学校の掲示板で小樽の理美容学校のパンフレットを見て、それで小樽に行こうと思いました。親や友達と喧嘩しながらも、周りを納得させたんだ(笑)。最短コースで免許を取るため、小樽の専門学校、東京の専門学校に進みました。ヨーロッパにも留学しました。帰国して商売をしようと思ったときに、親から離れたいつて思ったけど、親がいる近くにはいなかったから、近くの都会小樽を選びました。修行先が小樽の専門学校だったっていうのもあるな。21歳11か月で商売を始めたが、最初は上手く行かず、自分の顔を覚えてもらう努力をしました。毎朝決まった時間に同じコースを散歩、夜には銭湯で一日三人の背中を

洗いました(笑)。それでお店に人が来るようになって、様々な関係者とのつながりが増えたな。

### 手宮で「イカ電祭り」を始めるきっかけ

― イカ電祭りを始めることになった経緯を教えてください。

山下さん…常連さんの中には、イカを追って九州などから北上してくるイカ船員もいました。彼らと一緒に飲みに行ったり、ホテルを取ってやりとりと(笑)。そうしているうちに仲良くなりました。ある時、イカ船員から恩返しにイカ電が使えないかと提案されたんだ。ちょうど僕は商店街を盛り上げたいと思っていたし、商店街が40周年で、若い人も多かった。誰もがうらやましく思う一番の商店街にしたかった。それで、イカ電でイカのよううに人をたくさん集めようと思ったんだよ。一、二回目は大赤字でした。俺は見えない所で男泣きしたんだな(笑)。三回目から俺が実行委員長になりました。まあ、その前も俺が委員長みたいなもんだっただけだな(笑)。何回も委員長をやめようと思ったが、「イカ電」山下」だからと続けさせられた(笑)。そして22回目で、委員長をやめようと、「もう祭りの名前を消しちゃえ」とイカ電を終わらせた。今思えば、軽い気持ちだったな(笑)。祭りを発展させるにはコツがあるんだ。

まず実行委員長は利害関係のない人がいい。スーパリーの店長が実行委員長になって、自分のスーパリーの商品を仕入れさせ、周りの不満がたまり、失敗した例も見てきた。それから、物を仕入れるときは借金を気にせず大量に仕入れたほうがいい。売れなかつたらおれが買うからってな(笑)。いざ売るときになったとき売るのが無かつたらお客さんも困るだろ(笑)。

### 手宮ビアガーデンについて

― イカ電に代わった手宮ビアガーデンについてどう思いますか。

山下さん…俺は、支える・見守るという形で参加しています。今のビアガーデン実行委員長を決めるときにもイザコザがあつたんだ。俺は年齢とかに関係なく、できるやつを実行委員長にしたかった。ビアガーデンの悪いところは、思い切りがないこと、親の商店の跡を継いでいるために外を見ていないことだな。第三回までは会議にも積極的に参加していたんだけど、商店街の発展のためにも、これからは若い人に頑張ってもらいたいね。

### 「利他心」が大事

― 今後新たなイベントなどは考えていますか。  
山下さん…自分では立ち上げるつもりはないな。

でも、そういうことをする人がいるなら協力もするし、「イカ電」の経験を伝えたいと思う。最初「イカ電」も他所から備品などを借りて、徐々に自前にしていった。俺が持っている備品は貸す。ちゃんときれいにして返すならな(笑)。そういう意味で「利他心」が大事な。人生において様々な出会いがあり、他人に助けてもらって生きている。出会いは大切だし、自分が何かあつたときは助けてもらうのだから。それと同じように「親を尊敬」することも大事な。やはり親がいなければ生きてこれなかつた。どのような人にも「利他心」を持つことが大事だと思うよ。

### まとめ

― 山下さんは心から小樽を発展させようと思つて行動している。祭りへの熱意や小樽への愛着が十分に伝わってくる。自分の信念を持ち活動をしている山下さんから学ぶことはたくさんあると思う。

【参考文献】「いか電まつり実行委員長・山下秀治さん」『北海道新聞』夕刊(1994年7月25日付)、「自分の店を繁盛させる前に、地域を元気にする 訪問理美容の先駆者山下秀治さんは日曜の夜は屋台のオヤジに大变身」『BYWAY後志』(2011年3月)、「この人に聞く 北海道理美容福祉協会理事長 山下秀治さん」『北海道新聞』(2015年12月1日付)



インタビューの様子



イカ電祭りの様子



お店の外観



お店内装。お店にヨーロッパ形式のバーを取り入れている。私たちも飲み物をこちそうになった。

チーム 22

矢嶋海土・矢野裕斗・上神田眸美

## ベテランバーテンダーの見た嵐山

はった やすひろ  
八田 康弘さん

BAR HATTAオーナーバーテンダー



### プロフィール

昭和38(1963)年、小樽市生まれ。小樽商科大学短期大学(現・夜間主卒。同56年、BAR HATTAを開店。同63年、現店舗へ移転。平成25(2013)年、竹鶴トップ・アンバサダー・オブ・ザ・イヤー2013、翌年、竹鶴ベスト・オブ・アンバサダー2014及び竹鶴シニア・アンバサダーを受賞。「マッサン」を通じて地域活性化の取り組みに関わる。

ドホテルが閉業したことで、グランドホテルで頻繁に行われていた宴会の二次会客が流れてこなくなってしまう。それが嵐山通りにとっては大打撃となり、少しずつ今の嵐山通りに近づいて行きました。母の話では、母が店をやっていた頃、母の店は「夜の銀行協会」と呼ばれていました。お店を開けていればお客さんが来るような、小樽が銀行で栄えていた頃です。最近では小樽と札幌が交通的に近くなり、運河や商店街を回って宿泊は札幌で、という人も増えてしまつて夜に小樽に人がいないんですね。

### 個性が強すぎてまとまらない

―嵐山の特徴について教えてください。

八田さん…嵐山通りは高いビルのない飲食街です。レトロな感じ、昭和のにおい、といわれるような雰囲気でカラオケでよく流れる映像のロケ地になつていたりします。演歌だけですけね。その分個性的な店も多いです。小樽唯一のダンスホールがあつたりね。一風変わった店が多い分、みなで何かをしようとしても個性が強すぎてまとまらないんですよ。

### 昼の運河と夜の花園がつながれば

―花園やひいては小樽が発展していくのには何が

八田康弘さんは、小樽の嵐山で33年間バーを経営しているベテランバーテンダーだ。竹鶴シニアアンバサダーの八田さんの店にはニッカウキスキーが取り揃えられており、小樽が余市に近いことが感じられる。その八田さんは小樽生まれの小樽育ち。18歳の時に母親の経営していた店の支店という形で嵐山通りに店を構えた。それ以降33年間、一度の移転はあつたものの長きに渡り嵐山通りを見てきた。今回はその八田さんに、特に嵐山通りに注目して花園の話をつた。

### バーがほとんどなかった嵐山界限

―なぜバーを開店しようとしたのですか。

八田さん…当時このあたりにはバーはほとんどありませんでしたし、港町ということで船員が行くようなスナックが多かつたのです。女の子とデートするのになスナックに連れて行くわけにもいかなし、かといつておしゃれなバーもないから自分で開店してしまいました。自分では行けなくなりましたけど。

### 客層の変化

―バーに来店される客層に変化はありますか。

八田さん…当然、昔からの常連客が年を重ねるにつれて年齢層が上がってきました。20年前の話

必要だと思えます。

八田さん…今の小樽は昼の運河、夜の花園と強く分断されています。ここが繋がればもつと人が増えると思うけれど繋がるきっかけも繋がるものもない。また昼によく見かける海外のお客さんも夜になると減つてしまふ。ホテルが足りないせいで札幌に日帰りしてしまうですね。また観光客の多くを占める中国人たちは物にお金を使つて飲食系にはまだまだお金をあまり使いません。爆買はまだ商品にとどまり、こだわりのある消費活動ということでバーにも目を向けてほしいと思っています。

### まとめ

―今回お話を伺つて、花園や嵐山通りの未来は今の若者にかかつているように思われた。嵐山通りをあげて大学生など若い人が中心となつて地域おこしになるようなイベントを行いたい。商大生の若い発想力で、昼の運河と夜の花園を結びつけるような企画が実現できれば今の小樽の衰退の歯止めの一助となるかもしれない。

【参考文献】「小樽の2人 竹鶴の魅力伝道」「北海道新聞」(2015年5月9日付)、「小樽チャンネル Magazine」(2015年12月号)

ですが、上司が飲みに誘ってくれたのなら喜んで!!とついて行つたものです。今の若い人は車通勤であつたり、仕事の用事で断ることが増えてしまふたね。それと上司世代のお給料が減つていこともあつて彼らの来客も減りますし、バーでどうやってお酒を飲むのか知らない若者が増えましたね。

### 昔の花園銀座は賑わいがあつた

―昔の花園銀座はどんな感じでしたか。

八田さん…土曜日は特に賑わいがありました。人と人がぶつかり合つて喧嘩になるくらいでしたよ。今はそういうのもなくなりましたね、人の肩がぶつかるほど人が集まらなくなりましたから。札幌の狸小路とは規模が違いましたがそれでも当時の賑わいはかなりのものでした。

### 嵐山通りの衰退

―当時と比べ今、廃れてしまつたのはどうしてだと思いますか。

八田さん…多くの若い人が働く場所が減つたことが大きな原因だと思います。また、住民たちが高齢化しているというのがありますね。15、20年ほど前から閉店が目立つようになってきました。店主のご高齢というのがありますが、やはり確実にありました。花園に関してはグラン



BAR HATTA 外観



内装



インタビューの様子

チーム 23

中川 万優理・藤林 茜・山田 隆太

## 公開座談会

### 「小樽のひとに学ぶ」 「花園界隈のいまむかし」



- 日程…2016年12月5日(月) 18時～20時
- 会場…三川屋2階(小樽市花園3丁目2-2)
- パネラー…越中順子さん(元越中理容所)、近藤順子さん(ヴィナス美容室)、佐々木一夫さん(運河プラザ喫茶「一番庫」)、佐々木徹さん(元佐々木銃砲火薬店、道井忠雄さん(三川屋)※五十音順、プロフィール詳細は各インタビュー頁に記載。
- 主催…小樽商科大学グローバル戦略推進センター研究支援部門地域経済研究部
- 司会進行…後藤英之(小樽商科大学グローバル戦略推進センター准教授)、座談会司会…高野宏康、小山田健(同センター学術研究員)

● 学生(村上啓輔さん、2年生)…私は小樽のことをよくわかっていない商大生になってしまっていました。花園といっても場所がよくわかりませんでした。花園でごはんを食べるのが好きなので、昔の地図を見たらここは行ったことがあるお店の近くだとわかりました。



● 佐々木一夫さん…私は昭和25年に花園で生まれました。実家はグラフィック商会というカメラ屋です。小樽の閉鎖社会が嫌で嫌で、大学受験を理由に早く出たかったです。東京にも出られず、札幌で5年間うじうじしていました。小さい頃はガキ大将でした。佐々木銃砲店には銃砲が飾ってあったのが印象的でした。花銀の裏側にあったスバル座には、犬がいてよくからかいにいました。佐々木さんのお父さんに追い掛け回されました。花園の交差点では夜な夜な商大生が山から下りてきて、雄叫びを上げて大きな輪になって交差点を封鎖する勢いでストームをやっていましたね。三川屋の親父さんが出てきて交通整理をしていたように思います。当時の商大生はそれだけ無茶なことをしても小樽市民に愛されていたという歴史を持っています。

● 学生(浅井萌花さん、1年生)…佐々木さんに地図を片手に花園を案内してもらいました。歩きながらこのお店は以前こうだったというお話や、子供時代の遊びや暮らしぶりを聞きましたが、今と全然違

今回、インタビューをお願いした方で、花園界隈にゆかりのある5名が集まっていた。三川屋を会場に公開座談会を開催しました。全三部構成で、第一部「昭和の花園」ではパネラーと花園の関わりについてお話を伺い、第二部「現在の花園」商大生と花園」では商大生5名が各自の活動と花園との関わり、花園の魅力などについて語り合いました。第三部「花園の魅力、いまむかし」では再びパネラーに現在と過去の花園の違い、魅力と課題などについて語っていただき、フロアからの質問に回答しました。約60名の参加者が熱心に耳を傾け、パネラーや学生に質問するなど、会場との活発なやり取りも行われました。ここでは内容の一部を掲載します。



公開座談会のちらし

#### 第一部 昭和の花園



● 越中順子さん…越中理容所は、昭和6(1931)年に父が石川県から小樽に渡ってきて床屋さんになって開業し、82年間営業していました。場所は妙見通りを下って左側で、色内花園の間くらいです。

うと思いました。特に印象的だったのは、三川屋さんやだるま湯などです。昔と比べて違うところと同じところを探すのが面白かったです。

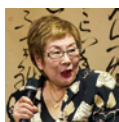


● 佐々木徹さん…うちの店の初代は、明治3(1870)年に黒田清隆の第三秘書として薩摩藩から北海道にやって来て、そのうち無尽を始めました。箱館戦争の残党が鉄砲100丁程持ってきてそれを担保にお金を貸したのですが、借りた兵隊が逃げてしまい、責任を取れと言われて商売を始めることになり鉄砲屋になったと伝わっています。うちの店は北海道の開拓に使ったダイナマイトも扱っていました。富山の薬売りが小樽の港に入ると神社にお祈りして狼や熊に会わないように祈願して、うちで鉄砲を借りていきました。剥製の仕事もやっていました。開拓が落ち着いて狼や熊も減ってくると花火に移行していききました。昭和20年に信香町から小樽駅前に移ったのですが、小樽港に空襲があるというので、花園銀座に移ってきました。三川屋の道井さんのお姉さんとは同級生です。近藤順子さんの亡くなった旦那さんは私と同年で、青年所会議所で付き合っていました。佐々木一夫さんとはガキ大将の頃からの付き合いです。



● 道井忠雄さん…曾祖父は石川県出身で、明治31年に北海道に渡って来ましたが、最初は長沼に入って、明治40年

越中理容所は旧日本銀行小樽支店に近いということもあり、支店長が代々通っていました。転勤になると必ずお見送りに行き、その後に次の支店長が挨拶に来ました。支店長ですが気安く話をさせていただきました。当時、妙見通りには陸橋が架かっていたんですが、バスが通れず不便で、私の父は陸橋の取り外しに奔走していました。実際に線路が撤去されたのは昭和62年で、父が亡くなった後でしたが、寿司屋通りができたこともあって、その後、この境界はどんどん発展していきました。



● 近藤順子さん…ヴィナス美容室の創業は明治20年代で100年以上続いています。いま四代目です。初代は堺町、戦後は今の政寿司の場所で営業していて、その後、少し妙見通りを上がった現在の場所へ移転しました。二代目ヨシさんは昭和40年にヨーロッパへ40日間行って新しい技術を小樽にもたらし、日本の技術向こうで披露してきました。

● 学生(山本歩美さん、2年生。学年は当時。以下同様)…授業で近藤さんにインタビューし、当時の小樽や花園が栄えていた時の話を伺いました。今の学生は花園にはあまり行きませんが、私は花園に行くのが好きです。インタビュー前に行った時は当時の面影を感じることができましたが、近藤さんのお話を聞いて昔の姿を想像することができました。

に札幌に来て今の二条市場の向かいの角に土地を買って初代三川屋を開店しました。そこは長男が継いで、長女は婿をとらせて分家として三川屋会館という料理屋を南3条西5丁目で行ったことになりました。うちの父は、札幌に店を出すなど兄弟の客をとってしまうから札幌には店を出すと言われて、昭和12(1937)に小樽へ出店することになり現在は私が継いでいます。私は若い頃から古いものに興味がありません。昔の電話帳などを見て街並みはどうだったかということを調べています。小樽全部を調べるのはいくら時間があっても足りないのですが、花園銀座三丁目にしては調べることにしました。小樽の歴史に詳しい旗イトウの伊藤一郎さんは潮陵高校の体操部の先輩ですが、伊藤さんからちびちび勉強するよりお店に写真を貼るといろんな情報を教えてもらえると言われて店内に写真を貼りました。すべて花園銀座三丁目の関連の写真です。

● 学生(井上優太さん、1年生)…私は商大写真部で写真にとっても関心があります。風景ばかりを撮っています。生まれ育ったのは小樽ですが、花園にはあまり来ることがありませんでした。写真を撮りながら歩いているうちに、花園の細い路地にはバーやクラブがたくさんあって古い看板が今も残っていたりと、いつも撮っていた風景とは全然違った場所、自然の風景ではない人がつくった街にも魅力があることに気がきました。

## 第二部 現在の花園 （商大生と花園）



● 学生（中野史崇さん、3年生）…出身は小樽で、今は長橋に住んでいます。応援団に所属していて、団長を務めました。応援団は小樽の皆さんに支えられてきました。以前は三川屋さんもよくご利用させていただきました。最近5月の春祭りに出演させていただいています。北大との対面式は、現在、グリーンロードやサンモール一番街（昨年）で、小樽では隔年で行っていますが、花園界隈のお店の方には本当にお世話になっています。

● 学生（川口颯太さん、2年生）…私は函館出身で、現在は緑1丁目に住んでいます。サークルは硬式

野球部で、体育会にも所属しています。硬式野球部は商大が出来てまもなく作られましたが、三川屋さんにはいつもお世話になっています。ちょうど再来週は納会があります。硬式野球部は毎年北大定期戦を行っていて、昨年は小樽で開催しましたが、沢山の小樽市民の方に応援していただきました。

● 学生（白田明日香さん、2年生）…私は美瑛町出身で、現在は緑町に住んでいます。夜間主コースに通っています。以前、地域活性化サークルの小樽笑店に所属していました。マジプロ（社会連携実践の授業）を受講していて小樽の皆さんにはお世話になりました。小樽笑店では新入生歓迎企画「たるさんぽ」を実施しています。新入生と小樽のまちをどんどん歩いて、毎年コロナビアのカフェをみんなで食べます。

● 学生（落合亮さん、2年生）…出身も住んでいるのも札幌市手稲区です。写真部の部長をやっています。授業が終わったら、よくカメラを持って花園へ行ってブラブラして南小樽駅まで歩いて帰るといふのを何十回もやっています。花園を歩いていると、いろいろな発見があります。花園は1年生の頃から身近に感じていましたが、特に花園銀座商店街のカメラの新映堂は、写真部でも個人

的にも大変お世話になっています。新映堂に朝行つて午後までに現像を完了させてほしいとお願いと、仕上げてくれます。部で大量発注した時に料金交渉にも応じてくれるので、本当に公私ともに大変お世話になっています。

● 学生（ショウレイさん、2年生）…私は中国からきた留学生で、富岡に住んでいます。サークルは写真部です。今年の春祭りの時、部長と一緒に写真部の活動に参加し、花園を知りました。花園は雰囲気がよく、とてもリラックスできる場所です。皆さんがご存知のとおりいま中国は発展していますが、昔のものを壊して新しいものをつくる感じがあります。しかし花園や小樽では、昔のものを大切にしていって、魅力を再発見して紹介していくことには大変意義があると思います。勉強します。

## 第三部 花園の魅力、いまむかし （今後の活性化に向けて）

● 佐々木一夫さん…先程のショウレイさんと写真部長の落合さんのお話にすごく感動して思わず拍手をしてしまいました。学ぶことが大事ということは本当に同感です。私は運河の保存運動やまちづくりに関わってきたのですが、運河を残すた



めにいろんなことをやりました。小樽って何だろう、まちづくりって何だろうと考えるようになった。結局、運河は完全に残りませんでした。結局、運河は完全に残りませんでした。結局、運河は完全に残りませんでした。

ほど、運河や小樽というまちに対する愛着と、将来に対する不安と希望が出てきました。でもその中で一番自分たちに力を与えてくれたのは、学んだことによって得られた、運河を保存することは良い事なんだという自信と小樽のまちへの誇りです。先程のお二人のお話を聞いて、花園や小樽をいろいろ学んで語れば語るほど、花園や小樽というまちをどうしたらよいか、どう行動したら良いかを考えることにつながるのではないかと思います。自分が小さい頃の花園は、学校から寄り道をして帰ってきて、路地裏が子供達の遊び場でした。

た。夜になると大人たちが集まってきて、そこが1杯やる場へと変わります。そんな街にまたなっていくといいなと思っています。

● 道井忠雄さん…先程は花園三丁目の歴史を調べる方法論を詳しくお話していただきましたが、実は私の希望としては各地で自分の住む場所の歴史や街並みを調べていってほしいと思っています。行政や研究者では表面的なことしか調べられません。各地で調べる方がいけばぜひ商大とも協力して進めていきたいです。町会や商店街のつながりが大きな役割を果たすと思います。私はノウハウがある程度つかんでいますので、ご興味がある方はご連絡ください。

● 越中順子さん…ちよつとしたきっかけで、今回のように昔の小樽の話聞くようになったし、自分でも考えるようになりました。新聞を見ても歴史のものは全部目を通すようになりました。80年も小樽で生まれて育っているのです、この坂の街、運河の街、人情の街に愛着があります。商大の若い人たちにバックアップしていただければありがたいです。これからがんばってほしいです。

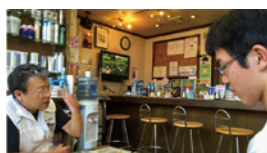
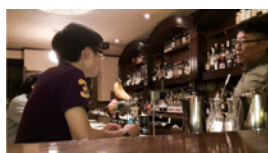
● 近藤順子さん…美容協会も高齢化が進んできました。お客さんも少なくなりました。それで、訪問美容を始めて、施設にボランティアでヘアメ

イクやマッサージを行っています。ダンスの人とかいろいろな人が来ますが、一番いきいきしているのが美容院の人だと言われると嬉しくなります。今後自分たちでできることをやっていきたいと思っています。

● 佐々木徹さん…今日来ている皆さんから花園銀座商店街のご批判を受けると思っていました。が、花園を愛してくれてすごく感激しております。昔はうちの商店街にこなればコーヒーが飲めなかった。家族でデパートに行つて食事をするのがステータスで、その後うちの商店街で買い物をする。うちの商店街は奢っていたところがありました。今はどこでも喫茶店があり、うちの商店街で買い物しなくて済むようになりました。うちの商店街も空家が多くなりました。今後は協力が必要です。本日はありがとうございました。

● 道井忠雄さん…ここ10年くらい、小樽の商店街ではこんなにやってくれるのかと思うくらいいろいろやっています。商大は昔とはずいぶん変わつて地域に関わつてくれるようになったとすごく実感しています。この調子でどんどん各商店街や小樽の街に入り込んでいただきたい。学生さんたちにもぜひ私たちの商店街も助けていただきたいです。今日はありがとうございました。

## インタビューの様子



## 小樽のひとに学ぶ

～小樽商大生が小樽のひとにインタビュー～

編集・発行 国立大学法人小樽商科大学グローバル戦略推進センター  
研究支援部門地域経済研究部

〒047- 0851 北海道小樽市緑3丁目5番21号

電話 0134-27-5482

H P <http://www.otaru-uc.ac.jp>

発行 平成29年3月

文部科学省  
地(知)の拠点